

9行目~13行目.

語句を補って、次のように解釈した方が良いと思う。

『イザナギイザナミが共に生んだのは 14島・35神である。

それは、特別の境地に到達してみれば、^{アツク}（天地と割割きたる時）^{くら}

(「このまゝこのまゝ高天原」と言うのと同じような意味で)

14島は乙のまゝ高天原たる境地であらう

35 神はそのまま高天原統治の日神（天照大御神）である。

このこと柄はそれ自体としては ハルヒメ という外郭だが、

この境地に到達してみれば、それはまた $\odot$ という中心

(即ち、3は神の魂/本体である イザナギイザナミ) である。

このイザナギイザナミを「二柱御祖神」と称する時は、

ミコウニ ミハタキ
こうした生神の妙用に着目して江戸時代といふのである。

みずから^行経となり、^対隣となつて、^お相交り

新たな血管を形成する作用のこと。

舞宇宙が宇宙を産み出す作用を象徴する神名が

アノミオヤ イザナギイザナミ フタハシラノカミ である

Chapter 74. 神国築成のためには、^マ○と^マ○の抱合合体により、
何らかの「新たな箇体」を成立させることが必要である。

こうした「新たな箇体の成立」は、神話上では、^{ミコリミ}生神と
表現されており、

それを成す代表的な神格が、イザナギイザナミ であり、
フタハエラミオヤノカミ

よって、この神名を唱えることにより自体が、
神国築成を助ける力となる。

Chapter 81. 即ち、イザナギイザナミ（本質は「別天神たる隠身の御神」）
が八百萬の神を生み給うたのだから、

我々もまたそれに倣い、この神名を唱えることにより

新たな箇体を形成し、ひいては神国を築成するのである。

とか天国とか呼ぶに等しく、主観しては、「天忍穂耳命」と称へまつる。亦名は、「稜威三柱神」にてまします。

其のやうに、「高天原」^{タカマノハラニ}「神留坐」^{カムツマリイマシマス}「皇親」^{スメラガムツミマスナル}「神漏岐・神漏美乃命以」^{オホセメデ}「八百萬神等乎」とあるの

を言ひ換へると、「スメラガムツミマスナル」「ミオヤノカミ」「ミオヤ」「オヤ」と称ふる「加徴」^{ガミ}は、即、「陰

陽」^ラで、「天地」^{アメツチ}で「経緯」^{タテスジ}で、「^③」「^④」「^⑤」であるところの「^②」で、その「^①」と結び結ぶ



「隱身」^{ヒノカミ}。その「隱身」^{ヒノカミ}の「カムロギ・カムロミ」としての「ヒメコトタマ」を仰ぎ、「ヒメコトタマ」のまにまに、「八百萬神等」を「カミナガラ、カミノマニマニ、集へ給ふ」のである。それ故に、

「神集集賜比」「神議議賜比」は、「カムツドヘツドヘタマヒ」と読み、「カムハカリハカリタマヒテ」と読む。 **隱身が分裂して、結んで「十」となる。**

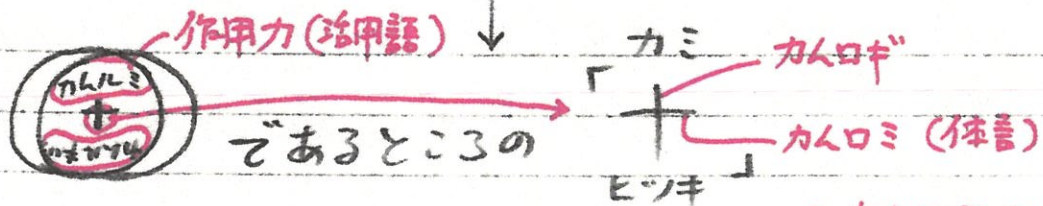
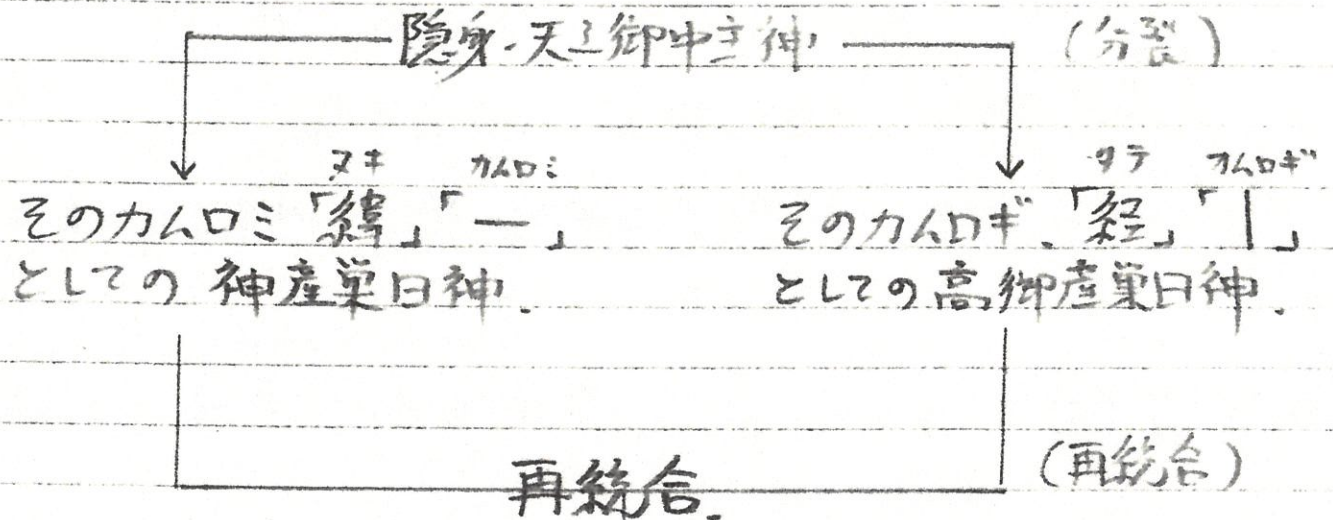
此の「カムハカリハカリタマフ」は疑義を相談するのではない。中心たり根本たる「神」には固より疑義は無いのである。けれども、外廓たり枝葉たる八百萬神は之を知らぬから、忘れて居るから、中心より外廓に向つて、根幹より枝葉に対して、疑ひ無からしむべく八百萬神の議を開陳せしむるものである。之を、人間的に云へば、直く正しく明く美しく誠に善き与論を作るのである。さうして、「神命」^{カムコミ・カムロミ}を明にし、その神命に応へまつる。之が、「カムロギ・カムロミ」なる「天神諸命」^{ヒノカミノオホセ}の「カミナガラ、神ノ国ヲ築キ成ス憲法」^{ミコトノリ}である所以である。此の「神国ノ憲法」は、

「我皇御孫之命波」^{アガ}「豊葦原乃水穂之国乎」^{アガ}「安国斗平久知所食斗」^{アガ}拝承しまつるのである。

未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230

『その^{カミ}「十」^{むす}と^{むす}結ぶ^{むと}(元としての)隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加微」^{カミ} ^{作用力によって、} ^{カムロギとカムロミは} ^{正しく結合している。}
^{アノミオヤ} ^{ヒノカミ}
 ⇒ 天祖 や 日神 を意味する。

典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミ
 と「組み直されて」ゆくのである。

此の詩は、正誠正義であれば正位正業を得て、山河大地も一圓光明体なることを実証し得らるるのであるとの意を詠んだので、正誠正義が「火」で「日」で「光」であることを教へて居る。

正誠正義にして神國を築くのが日神事で、之れを成さしむるは直霊の妙用である。

直霊の妙用と云ふのは「ヒ」なる霊が、直日の統率のままに妖魔群団身と成り、妖魔軍として妖魔を調伏済度救出するの意で、妖魔なる禍津毘が直く正しく妙用を現ずる神と化り神の神業を以て太平嘉悦の楽土を築成するの義である。

神に帰順した禍津毘の活用だ

と云ふに等しいので、大禍津日とも称へて、神ならざるの神である。古事記に「別天神」と記したのは、此の意味であつて神魔同凡に在るのである。

神と魔が同凡に在るのは神ではなくて神人であるから尊と称へて、独神とも隱身とも萌騰之物とも天神諸命とも神聖とも純男とも人とも独化之神とも俱生之神とも一神とも別神とも天祖とも祖神とも二柱神とも傳へたところの命（みこと）で天命（いのち）で大道（みち）であります。之れを祖神垂示の大道と呼ぶことが出来る。

ナホビの妙用

主体

別天神 神なるざるの神 神魔同凡のカミ
 (別名 大禍津日)
 オホマカツヒ



その作用

(実際には、多数ある作用力のうちの一つ)

直霊^{ナホビ}の妙用, マガツヒ^{マカツヒ} (神に帰順した禍津毘) の活用

と
 「零」なる霊

第一段階

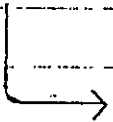
1. これが、^{ナホヒ}直日(中心)の統率のままに ～と成る。

↓
 妖魔群団身 (中心の統率に従っているのだから、
 これは「神に帰順したマガツビ」である。

第二段階

2. これが、妖魔軍として (妖魔のままに)
 ～を調伏済度救出する。

↓
 他の妖魔 (まだ神に帰順していないマガツビ)



こうした二段階の妙用によって、
 太平嘉悦の楽土(神国)が築成される。

2020.2.18.(木)

NO.

DATE

ヨモツクニ
素材領域

ナカツクニ
筒体領域

ヨモツクニ
素材領域

無^も宇宙^{うちう}
(極大極小のた)

直日

奇

同下

幸

真

荒

大坂

より粗雑な部分は
そのままに焼かれ
ハラへの対象となる。

普通は省略してこ
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

④

より精妙な部分は
削り直されて、
このミタマへ。

(尽天尽地のた)

瑞垣

4-

故に、「ふるべゆら、ゆらととふるべ、ぬなとももゆら」は、
全体として「マガツビを救まし、これを無宇宙の^ヒ零にまで
分解して、次の何らかの資材とする」ためのコトワとなる。

3-

「宇宙化育の秘神業」^{ヒメカミツガ}を表現したコトワが
(スリとカタメナス) 「ぬなとももゆら」

2-

このマガツビを、
調伏靖度救ます
神言カミコトバ

「ふるべゆら
ゆらととふるべ」

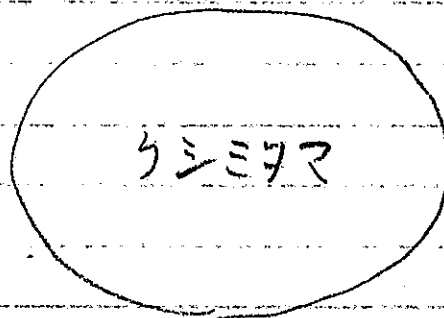
1-

マガツビ マガゴト
禍津毘の禍言

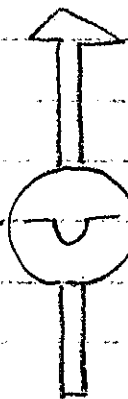
「ふるべゆら」

マガツビをこれ自体と
指す用語か？

『死後、解体される』(ツキヨミ)の説明



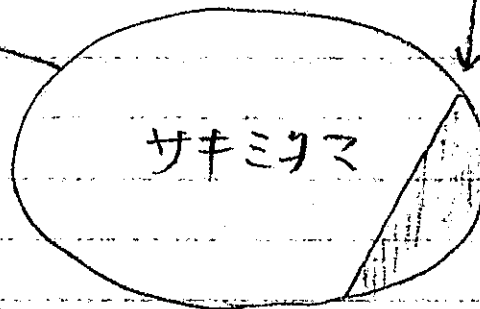
タマが中 セスキノミヤ
玉垣の日陽宮



ヒスミノミヤで粗から精へと
組み直す際にも、
あまりに粗雑な部分は
組み直しようが無いので、
切り捨てざるを得ない。

中心に正しく帰順
した部分は、
「神と化りたるマガツビ」

なので、
切り捨てられることなく、
日陽宮で組み直されて、
ウシミタマの一部と化す。



(矢)

この切り捨て
られた部分が
ツキエミノミヤの
許へ。

帰順していない
マガツビ

(2020.2.18.の図中。
「同下」の解説でもある。)

幸身魂
(第三魂)

相対的に
永遠的存在

中垣

真身魂
(白魂)

滅ぶべき存在

アワサウミツマとして残り

最終的にはヒスミミヤで組み直されて

幸身魂の新たな一部分となる

(こちらを上へ導くのがサダビコノカミ)

(月夜見のカミワザ)

ワガシとして
削り落とされる
部分

→ ヨモツクニへ
送られて

何分の素材となる

(ソコドクミツマの
ソコドクミツマたる
カミの部分)

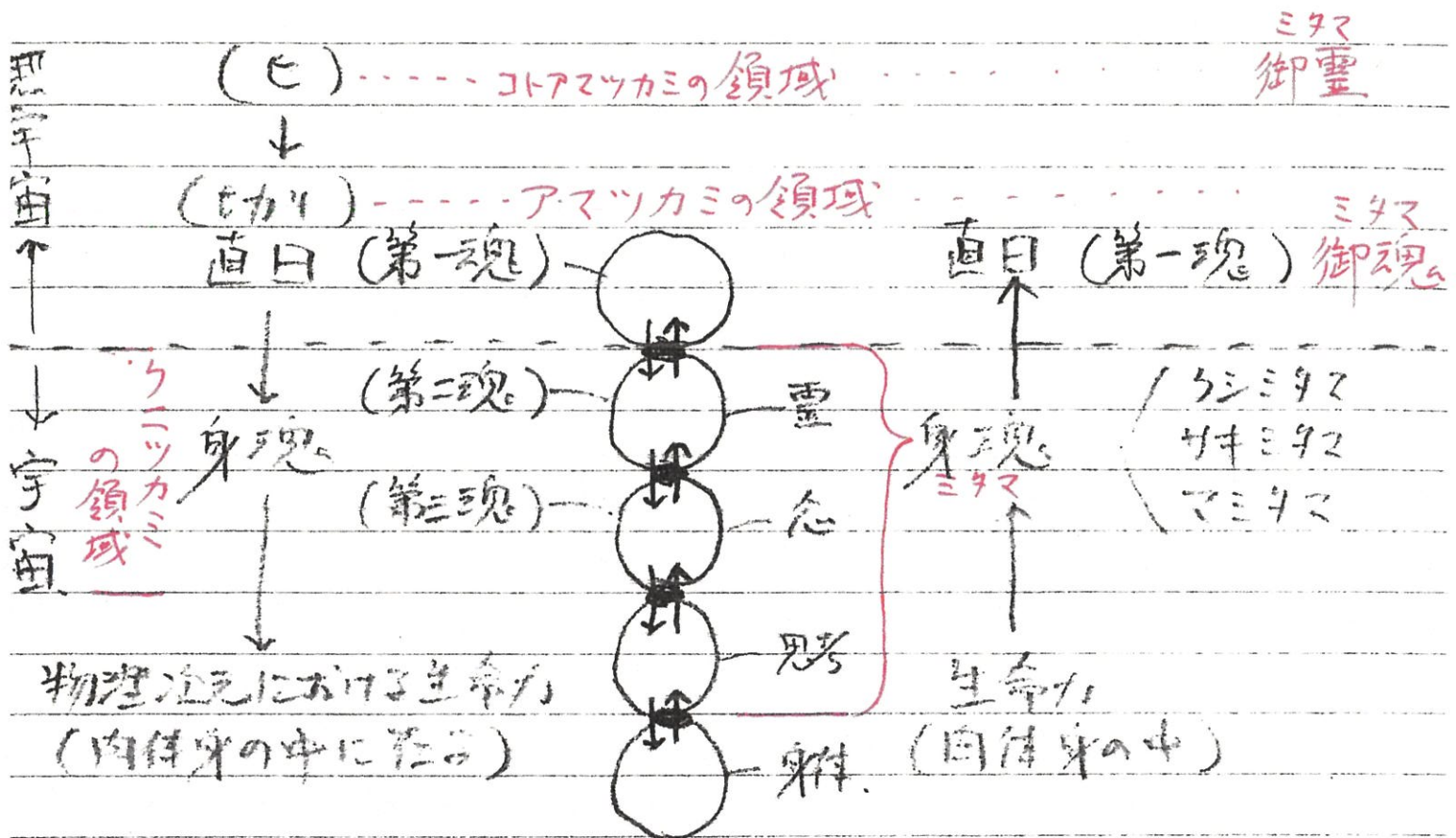
流出

と

帰還

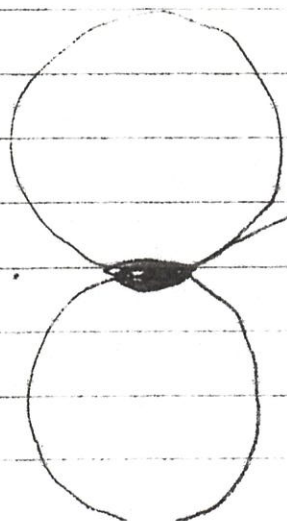
(生)

(死)



日陽宮で組み直されて、
次第に精から粗へと
次元を降って来る。

→ 逆に粗から精へと
組み直すことで、
次元を昇ってゆく。



(4つとも)

球と球との接触点を「日陽宮」と呼ぶ

物には無いとか有機体と無機体とは異るとか峻別し主観の有る者と無い者と區別して取扱はうとするかも知れぬ。けれどもそれは自己の省察が足らず他を觀察する途を忘れて居る為である。

古典を解くには、

第一に、大宇宙の唯一であることを知らねばならぬ。

第二は、唯一つである大宇宙はそのまま万有であることを知らねばならぬ。

第三には、唯一つであり万有であるものは唯一筋の真理で貫かれて居ることを知らねばならぬ。

第四には、以上の故に一塊の土にも一滴の水にも一抹の雲にも一陣の風にも一閃の光にも一管の音にも一葉の草にも一点の塵にも大宇宙の事理は具はつて居ることが判らねばならぬ。

第五には、事実で真理である唯一の道とは極大で極小で大平等であることを知らねばならぬ。

第六には、大平等であるのに其の万有がその中に在つて相互の対立を認めるのは個個の結晶が異なる為であることを知らねばならぬ。

第七には、万有はその結晶が異なる為に牆壁を高くし境界を固くして居るがそれを取り除きさへすれば一円光明の身と成るべき理を知らねばならぬ。

第八には、牆壁境界を撤したる人の身は人の身ながら「カミ」と称すべきことを知らねばならぬ。

第九には、人の身としての神は神代の神と不二であることを悟らねばならぬ。

第十、唯一つなる大宇宙とは零なる一であるから万有はそれを種子とするのである。

第十一、宇宙万有は総べて主観すると共に他を客観し他より客観せらるると共に自らは主観して居るので主観

中に客観が有り客観中に主観が有る。相互に観門を開いては相互観をする。裏からも観れば表からも観る。総合しても観れば分解しても観る。自他を総べても観れば箇箇分分を箇箇分分のままに表裏主客観をもする。その観門は多角多面重重又重重百八観千八百八万八億無數観が行はれる。そこで唯一つの大宇宙ではあるが、

「客観しては高天原で○^{ヒカリ}であり」

「主客合観しては神漏岐神漏美二柱皇親命にてまします。」

「主観しては神で○^{ヒカリ}であり」

「高天原^爾神留坐」とあるが

対立的境涯に出頭没頭しつつある人類を対象として分り易からしむる為に「神留坐」と書かれたのである。

「カムツマリマス」とか「カムツマリイマシマス」とか読むので其の「ツマリ」とは充塞の義で「タカマノハラ」それ自躰が然うだと云ふに等しい。それで客観しては「タカマノハラ」であるが主観しては「カミ」でその「カミ」は一神で万神である。

人はそれを人としての機能相応に拝むより外は無いから種種様様の名称で讃めたり貶したり勝手なことをして居る。従つて自分等人類の祖先を「カミ」と拝むものと乃至「微生物」だと論断するものと実に多種多様である。

此の祝詞には唯一の高天原が「カムロギ・カムロミ」二柱の皇親であることを伝えて居る。

「皇親神漏岐神漏美乃命以^氏」とある神漏岐神漏美二柱皇親命を古事記には伊邪那岐命伊邪那美命二柱神とも高御産巢日神神産巢日神二柱御祖命とも伝えられてある。まるで別なやうな御名を同じ神の亦の御名だと申しますのは此の神が共に等しく宇宙万有産出の祖神にてましますが故である。その御名の異なるのは之を拝む人の異なるが故であり或は時を異にするが故であり亦は処を異にするが為である。それは単に日本古典の上のみではなく各

各国各地の古典に通じて認めらるるところである。

宇宙万有産出の祖神は對待を絶して居ること固よりであるから時間に拘はらず空間に限られざる唯一超絶の神にてましますのである。それで古事記は「隱身」とか「独神」とか「別天神」とか記し、極大で極小で極で無極で「零」であることを明にしてある。零とは大平等であるが人は其の中に自己なる一点を認めて其処に「カミ」を拝む。故に此の神は既に零ではない。隱身でも独神でも別天神でもない。相對の妙用妙象を現はされたのである。ではを御声として拝めば「カムロギ・カムロミ」であり御象として仰げば「伊邪那岐・伊邪那美」であり数として算めば「〇十」で $\oplus$ で十字架で十である。

此の「カミ」とは一であると共に二でまた三で五で十で百千万無量である。一としては天之御中主神で二としては高御産巢日神神産巢日神で三としては天之御中主神高御産巢日神神産巢日神で五としては天之御中主神高御産日神神産巢日神宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神で十としては宇比地邇神須比智邇神角杵神活杵神意富斗能地神大斗乃弁神淤母陀琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神で百千万無量としては百八百万天津神国津神と称へまつることを古事記は伝へてある。なほ日本書紀旧事本紀祝詞式等と対読すれば一層明瞭になるし他国他民族の伝へた古典をも併せて見るならば更に良いのであるが今は成るべく煩を避けて古事記だけに止めたい。

さてこの大宇宙たる高天原は超絶零界であるがその御活用を仰ぎまつれば神漏岐・神漏美として万有を発現するので之を皇親と讃へまつる。その皇親とは「ススムツ」であり「スメラガムツ」であり「スメラガムツミマスナル」であり「スメリオヤ」である。「スメリオヤ」としては皇祖である。けれども皇祖とは等しくして僅に異なる。「祖」とは「ミオヤ」であるが「親」は更にその御活用を示して相和ぎ相親しみ相睦み相誘ひ相合ひ相交はるの義

であるから「カムロギ」であり「カムロミ」であり「カムルミカムルギ」である。
名詞 動詞
駄言でもあり活用語でもあり其の時と其の人と其の処と其の祭典の目的とに相応して変化するのである。

天之御中主神と称へまつるのみでは一切を包括し給ふ御名であるが其の御活用を仰げば高御産巢日神神産巢日神にてましますからそれを祖神としては神漏岐神漏美とも伊邪那岐伊邪那美とも称へて皇祖で皇親で「皇親大倭須米良岐美」で「吾大伎美」で「伎美」にてましますのである。之を支那人は陰陽と呼びまた乾坤とも称へ近く身に取りては男女と云つて居る。日本人は敬虔の念から「加微」と称へ支那人は不可測だからとて「神」と呼び陰陽だと云つたまでの異別なので共に「祖」で「親」で「ミオヤ」で「オヤ」である。

その「ミオヤ」の「ミイノチ」の変幻出没が人であり物であるからとて「天命」とか「命」とか書き天神の詔命なればとて「ミコト」と称へ「ミコトノリ」と仰ぎ「オホセ」なりと畏みまつるのである。

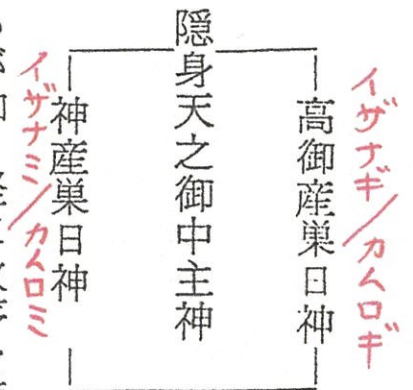
此の御声として拝む神漏岐神漏美の妙用を高天原にては「男建」と呼び「雄詔」とも称へて大宇大宙の勅命則

別天神の命で古事記に所云の「天神諸命」である。そこで神漏岐神漏美として男建び雄詔ぶ大宇宙の神勅のまま

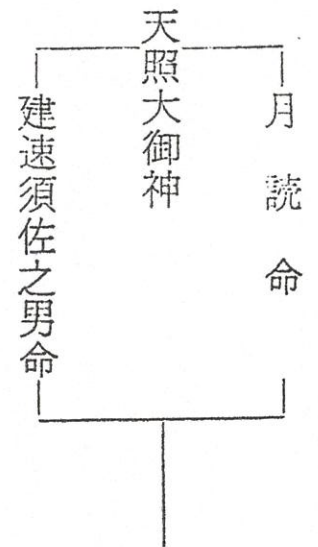
に皇親の神には百八百万と在る限りの神を神ながらにお集め遊ばされてその神道を神の遍爾遍爾神顯し各自各自の神性を發揮させようとして神ながらにお譲り遊ばされお諭し遊ばされお教へ遊ばされお導き遊ばされた。その結

果として八百万神は皆悉宇宙の事理を明にしたのである。之を人間的に観て現今の詞で言ふならば「正しき与論」を作られたので茲に其の真理のままなる国を建てさせ給ふとて先其の中心の超絶性をお示し遊ばされたのである。則国家機構の中心は唯一超絶神にてましまし日本民族は之を皇御孫之命と讃へまつり仰ぎまつるのである。

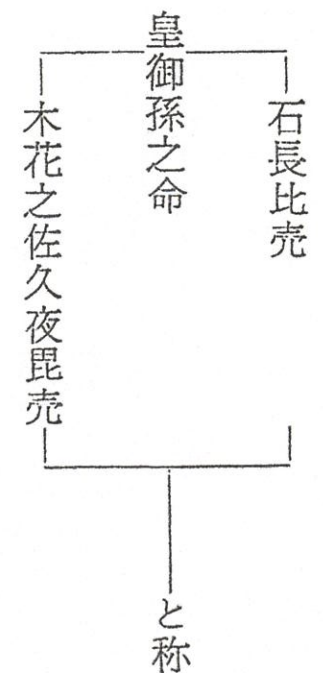
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



の神としては

大國主の別名

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美——と称へまつるのである。

八重事代主

大國主の息子

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに
よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、
アシハラシコヲとヤヘコトシロヌシの諸力をも
行使できるようにするのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコヲは生大刀・生弓矢で八十神と

阿那畏。

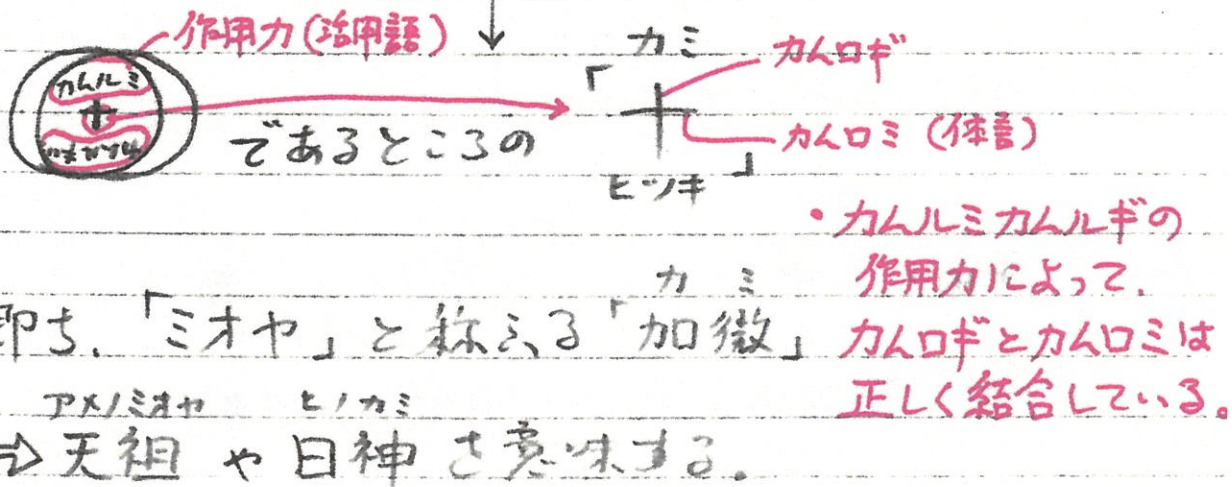
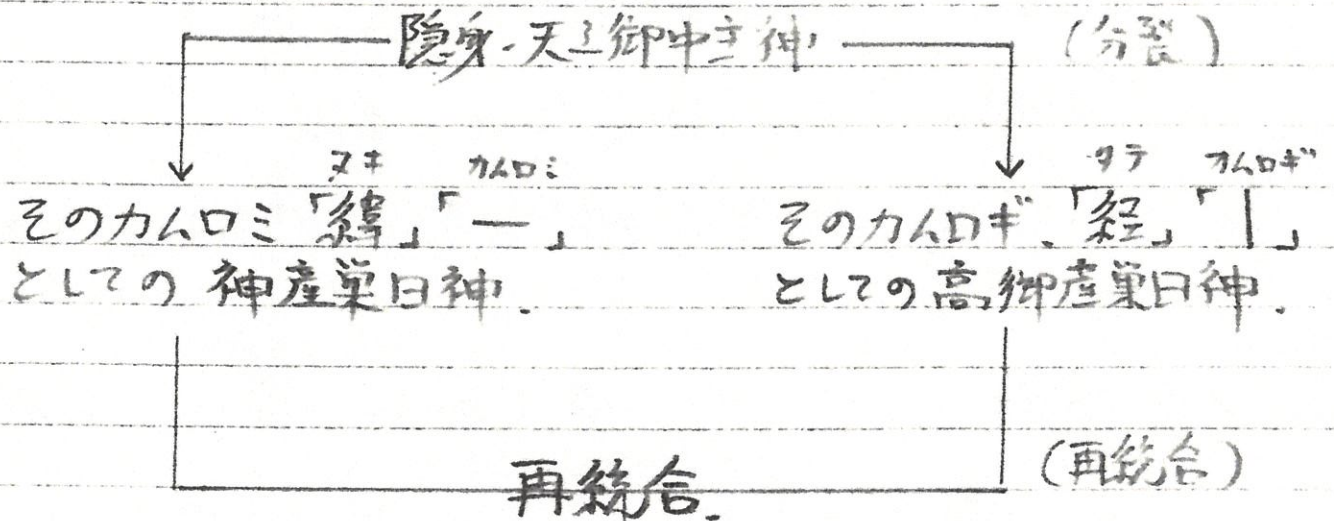
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

未来250頁の図。「ヒノカミとしては」の説明。

未来230.

『この「^{カミ}十」と結び結ぶ(元としての)隠身^{ヒノカミ}』



典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神。

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

ば零の内容が二であり三であり四五六七八九であり然うして一であり十であるが為に其の一二三四五六七八九の加減乗除が美とも醜とも善惡とも正邪曲直とも變化し治乱興廢ともなるのである。之を換言すれば善惡も美醜も正邪曲直等も「我」の外なるものではないのである。此の「我」を古聖は「如来」と呼ばれた。そこで

「如此依志奉志國中爾荒振神等平涉神問志問志賜神掃掃賜比語問志磐根樹立草之垣葉平毛語止天磐座放天之
八重雲乎伊頭乃千別爾千別天降依志奉伎。」

と、高天原なる皇親の命には人の国を神の国と築き成されて建国の天道をお示し遊ばされたのである。此処で注意すべきことは「天磐座・天降」の文である。「天磐座」は○界であるから説明語の用ゐやうが無い。けれども此処に用ゐた文字に従つて堅固の意とするならば堅固になること此の上も無い。が此の「磐」は「イハサカ」の「イハ」と等しく正しく発き升る義を表したのである。それ故に人間から仰げば「天降る」であらうが「高御座」たる「天磐座」の御光は十方に等しく発くので「正しく升る」ので方位に拘はるのではない。十表に雄走る稜カミノミヅ威である。神代に於ては之を「稜威雄走神」と称へまつる。その雄走が発き発くのであるから茲に「天磐座放」とある「放」は「従」の誤りである。若しも「放」とするならば下降転落で不祥の語となる。天之磐座を放れずして天降りしますが故に神位なのである。此の神位を高御座として国土を經綸し給ふが故に重重無尽の円光として万世一系にましますのである。

既に述べたる如く中心は唯一超絶の零神ヒノカミでそれが高天原にては皇親神漏岐神漏美命と仰ぎまつられ神国淨地を築きては皇御孫之命と讃へまつらるのである。然うして皇親の神には建国の大本をお示し遊ばさるると与に悪神邪鬼をば教へ諭して其禍マガを掃ひ清め草木の一葉までも乱れ擾ぐこと勿らしめてさて高天原なる神座より神代の

ままたに神ながら神の国を築き成すべくその神を人間世界にお降り遊ばされたのである。皇御孫之命にはその皇親の勅命のままに猛然踊躍してお降り遊ばされたのである。

往くか返るか来るか去るか。窮め来れば唯は一点である。之を古老は「高天原」だと教へさせられた。斯くして此処に此のまま高天原は成り成る。

「如此久依左志奉志四方之國中斗大倭日高見之國乎安國止定奉氏下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氏皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氏天之御蔭日之御蔭止隱坐氏安國止平氣久所知食武。」

之を第三段とする。第一段では中心としての皇御孫之命とその外廓たる八百万神との關係を教へて先其の中心の確立と外廓の統一とを命ぜられ第二段では外廓の分裂と統一と其の結果とを明にせられ「天之磐座」のそのまゝなる神國淨地を人間世界に築き成したる曉を第三段に詳述せられたのである。

その神國淨地は「大倭日高見之國」と呼ばれるので「四方之國」を外廓として緯の在るかぎりと「下津磐根」「高天原」と下の下までも上の上までも經としての在るかぎりとを「美頭乃御舍」即「天之御蔭日之御蔭」としてその中心に隠り「隱身天之御中主神」のそのままに上天下地四維八隅一切合切を安らけく平けく統治統率せさせ給ふ。

それは人間身として拝しまつることを得る御玉躰が高天原にての皇親神漏岐神漏美命にたましまし隱身の神としての天之御中主神にたまいますが故に近く図解を借りて説明すれば○なる球躰で⊕である。之を古聖は十字架と教へられた。「十字架上一点之火」は時空を超えて時空を現はしつつ過去も如是将来も如是現在も如是經に緯に際涯無き日なる光である。之を「日神」とも「⊕」とも「・—○」とも稱へて来たのは人間身の機能相應に判り易からしめた神の御意である。

日神によつて完成された宇宙全体を表現する時空・—○と描く。(262頁)

十四秘言と「一点之火」

十四秘言は、「神界の完成に努めるコトタマ」であり、その末尾六音は「高天原現出のコトタマ」である。

また、仮に図を描くならば、無宇宙「○」と、宇宙は「⊕」と描くことができる。

この図の^{タデ}経と^{ヌキ}緯は時間と空間であり、その交点は「十字架上一点之火」である。(未来252頁他)

その一点は、「主体」としては、「時空を超えた（無宇宙の）実在」であり、また「活用」としては、宇宙の側に作用して「時空」を現す。

即ち、この一点は、「無宇宙」と「宇宙」を繋ぐ経路であり、「^{ミツガキ}瑞垣」であり、人間はこの一点を感得することによって初めて無宇宙（^{カミヨ}神界）に参入することができる。

十四秘言によって「神界の完成に努める」ということは、裏を返せば、^{みずから}自身が「神界に参入した意識を持つ」ということでもある。

そして、そのためには、「十字架上一点之火」を感得する必要がある。

その状況を図解するならば、おおよそ次頁の図のようになるだろう。

図1：一個の円で 無宇宙と宇宙（全宇宙）を表現する場合
 （「^{アツチ}天地概略図」も参照）

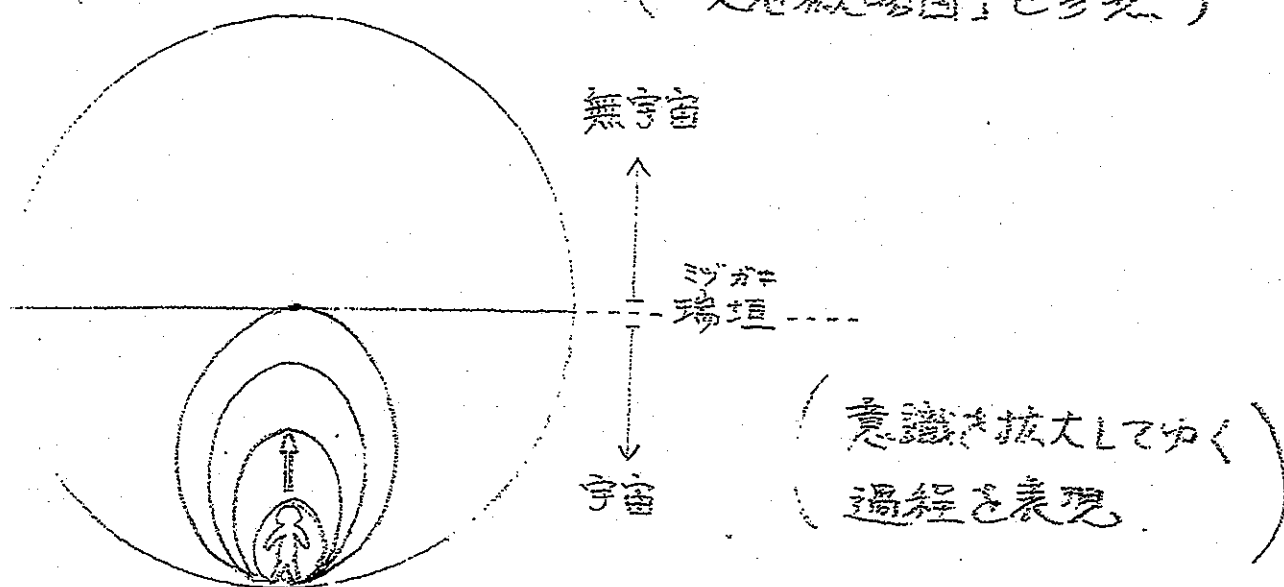
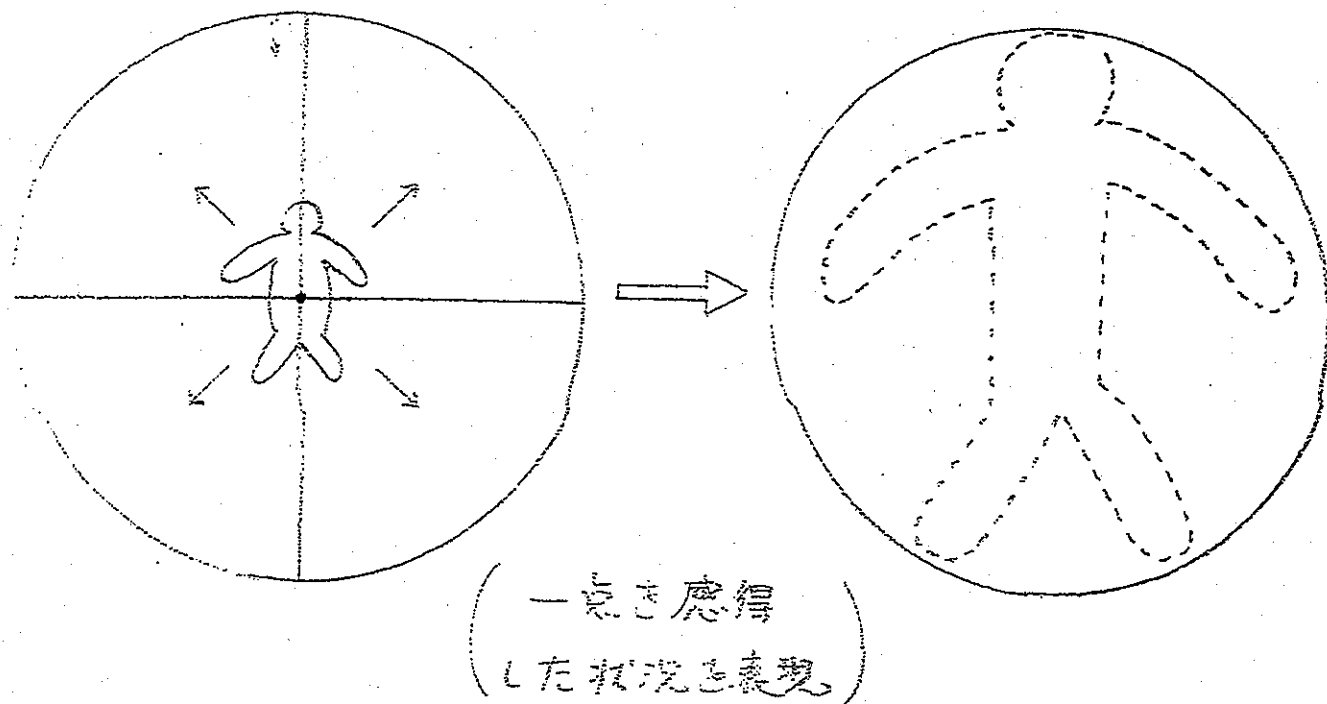


図2：宇宙と無宇宙とをそれぞれ別の円で表現する場合

^{タテマチ}
 宇宙（経緯あり）

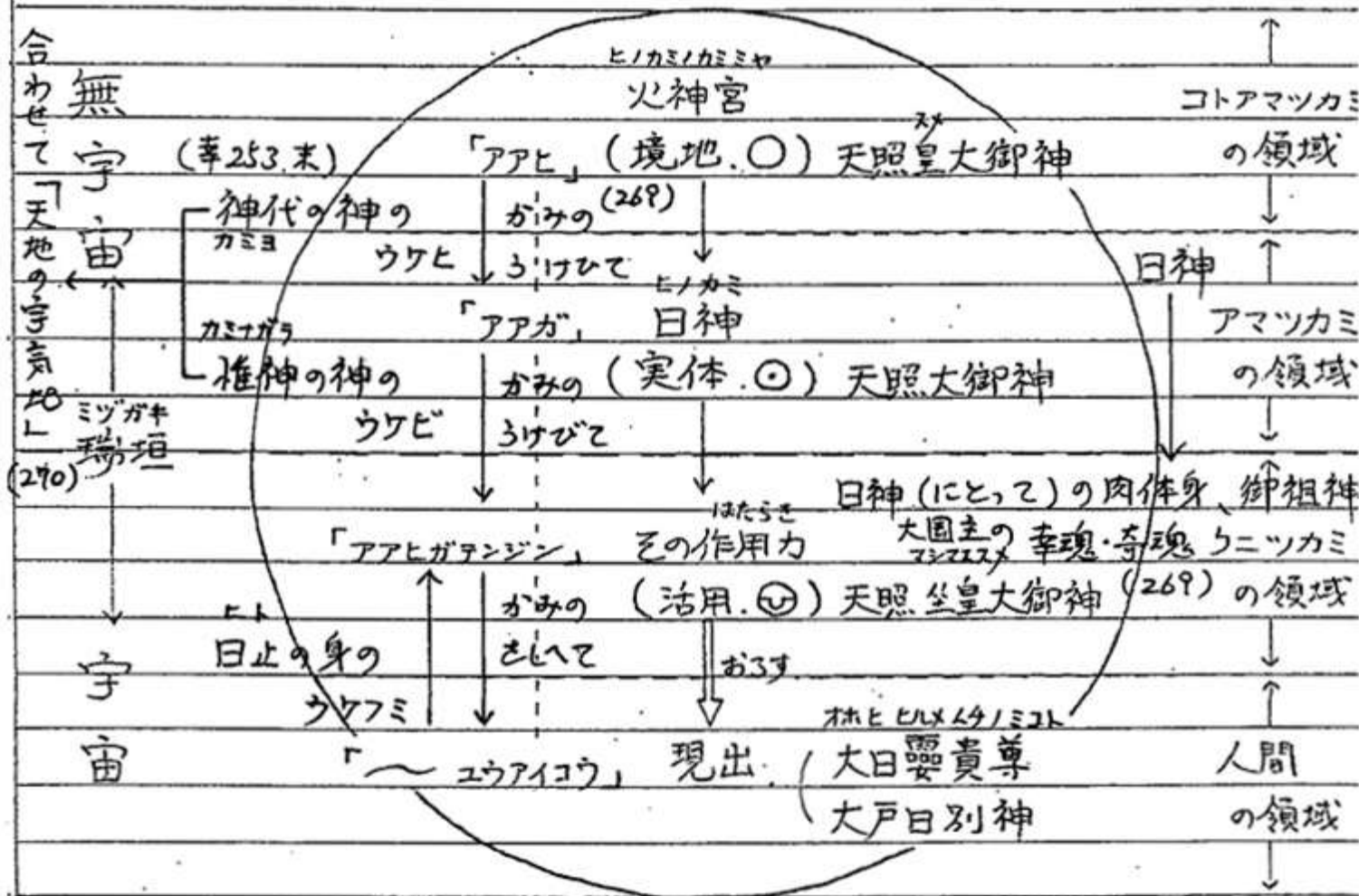
^{タテマチ} ^{ヨコマチ}
 無宇宙（経緯をなし）



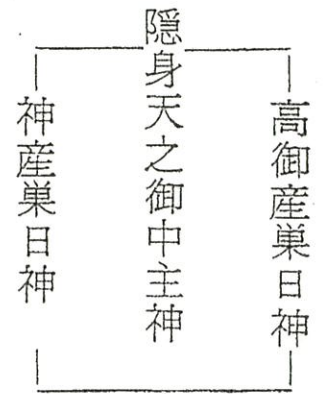
2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

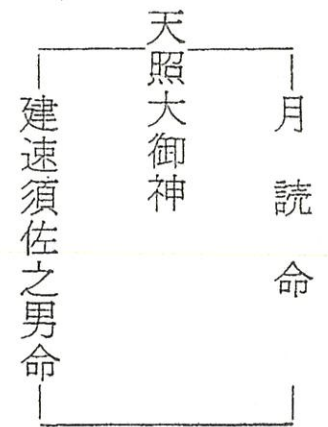
(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
(日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。)



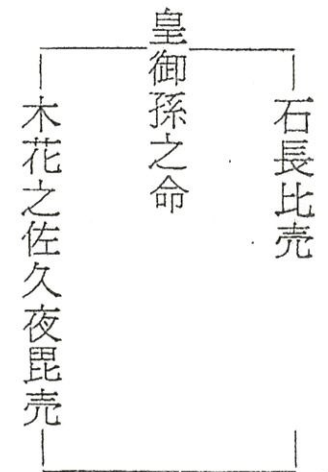
はてしと神の零ヒ



はてしと神の魂タマ

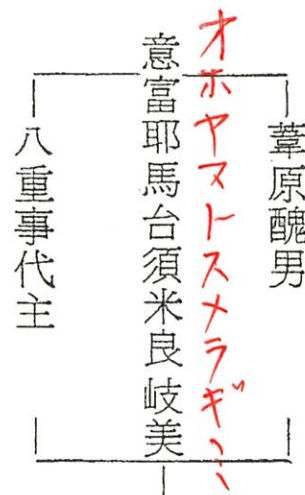


はてしと神の身ミ



と称

へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては



修理スリ(破壊)の作用を司る。

(左側の二神は固成の作用)

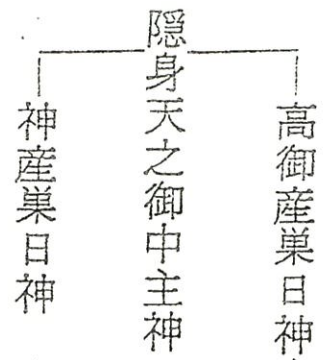
ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

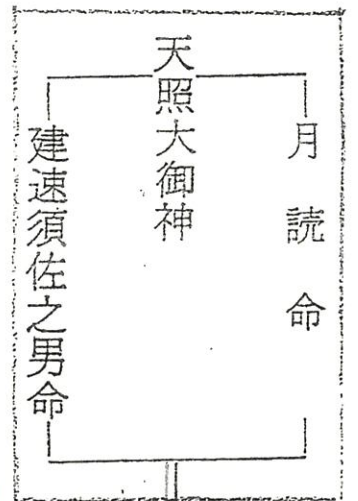
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

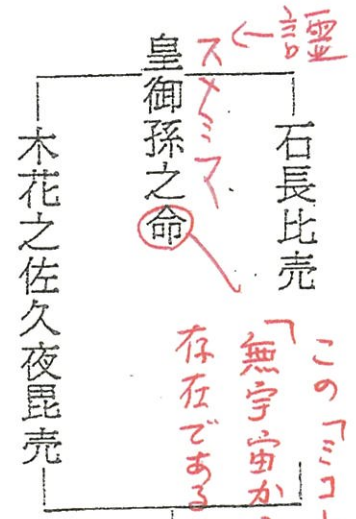
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



まつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美と称へまつるのである。

八重事代主

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

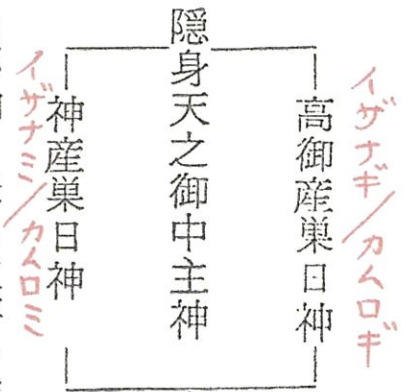
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御覧はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隠身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

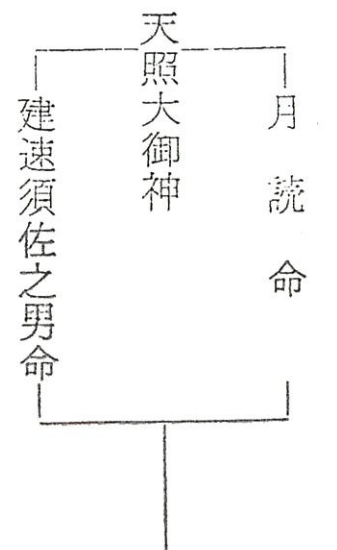
「十指兩掌」で言う「零の神としての御生誕」
即ちスナミマノミコトもまた本来は無宇宙の「ヒ」であ
り、それが「ヒ」のままに結ばれて降りて来たのである
「最初から身の神として在った」のではない。

この「ミコト」は、
無宇宙から降りて来た
存在であることと表現
と称

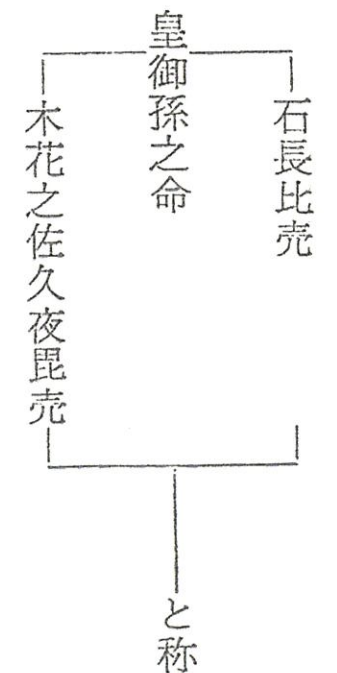
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



の神としては
へまつるが如く經に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界

大國主の別名

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美——と称へまつるのである。

八重事代主

大國主の息子

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに
よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、
アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも
行使できるようにするのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神と

阿那畏。

平定する修理の諸力。

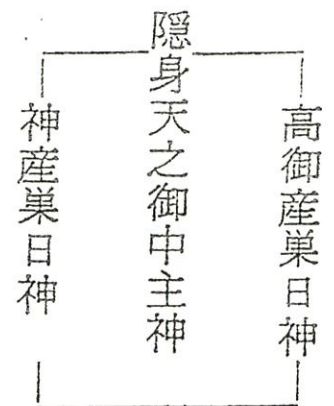
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承します。

ヤヘコトシロヌシは話ままとある、などの

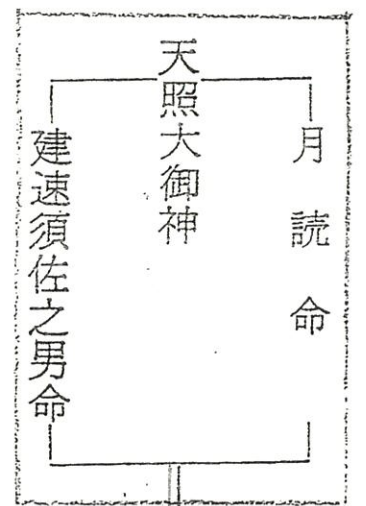
固成の諸力。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

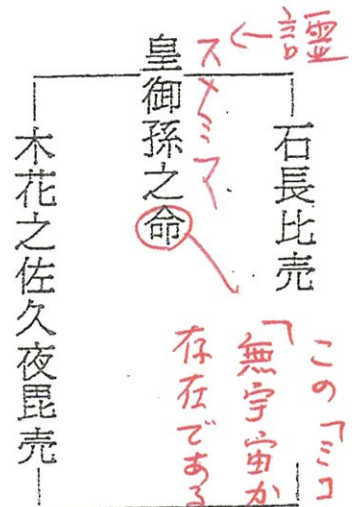
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



この「ミコト」は、無宇宙から降りて来た存在であることを表現し、と称

まつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美——と称へまつるのである。

八重事代主

「最初から身」の神として「在った」のではない。

あり、それが「ヒ」のままに結ばれて降りて来たのである

即ち、スナミマノミコトもまた、本来は無宇宙の「ヒ」で

「十指両掌」で言う、「零」の神としての御生誕

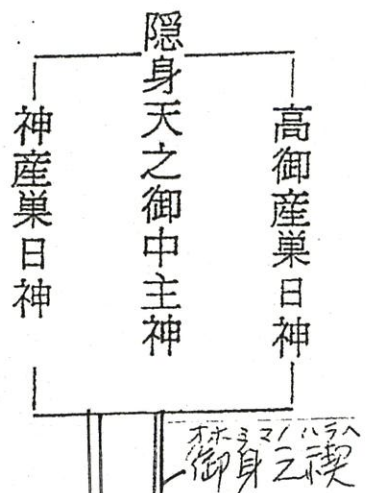
ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に
ある。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官
に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

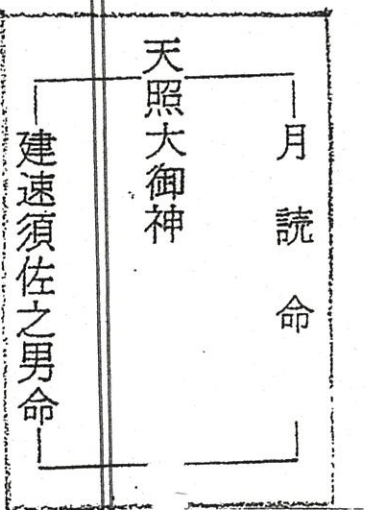
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御
礼はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見

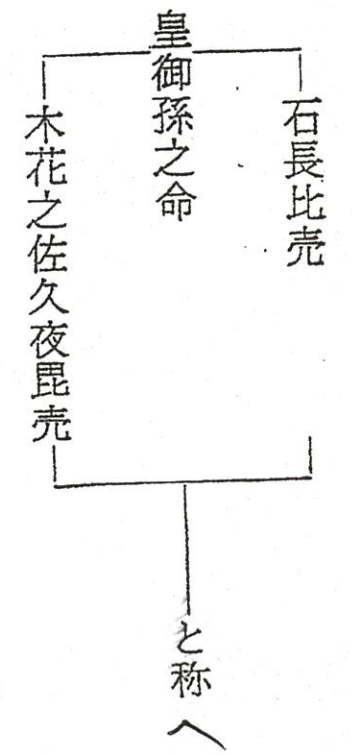
はてしと神の零



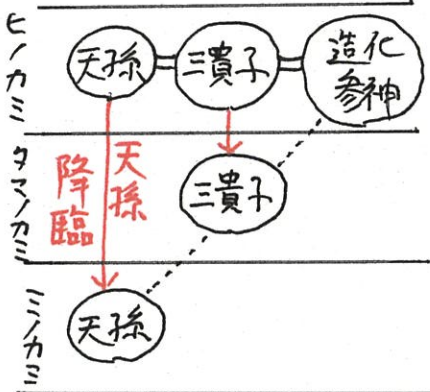
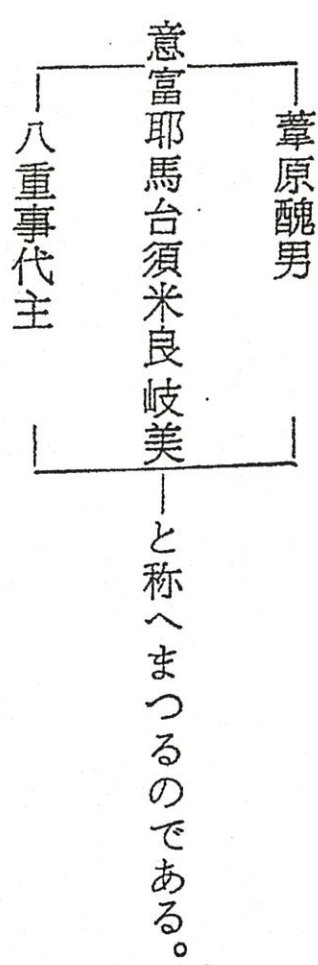
はてしと神の魂



はてしと神の身



まつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

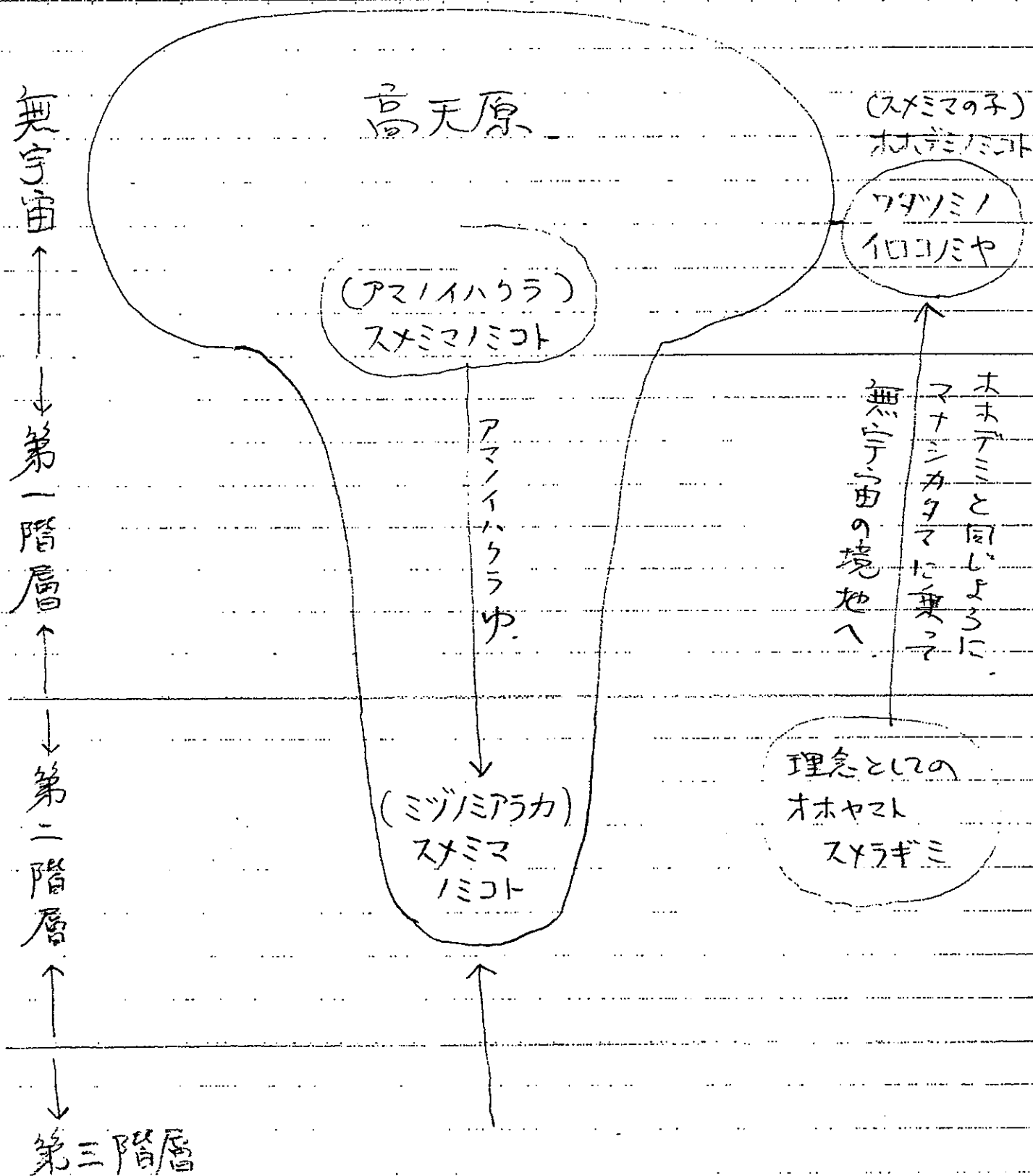


ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に収る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官に捧みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

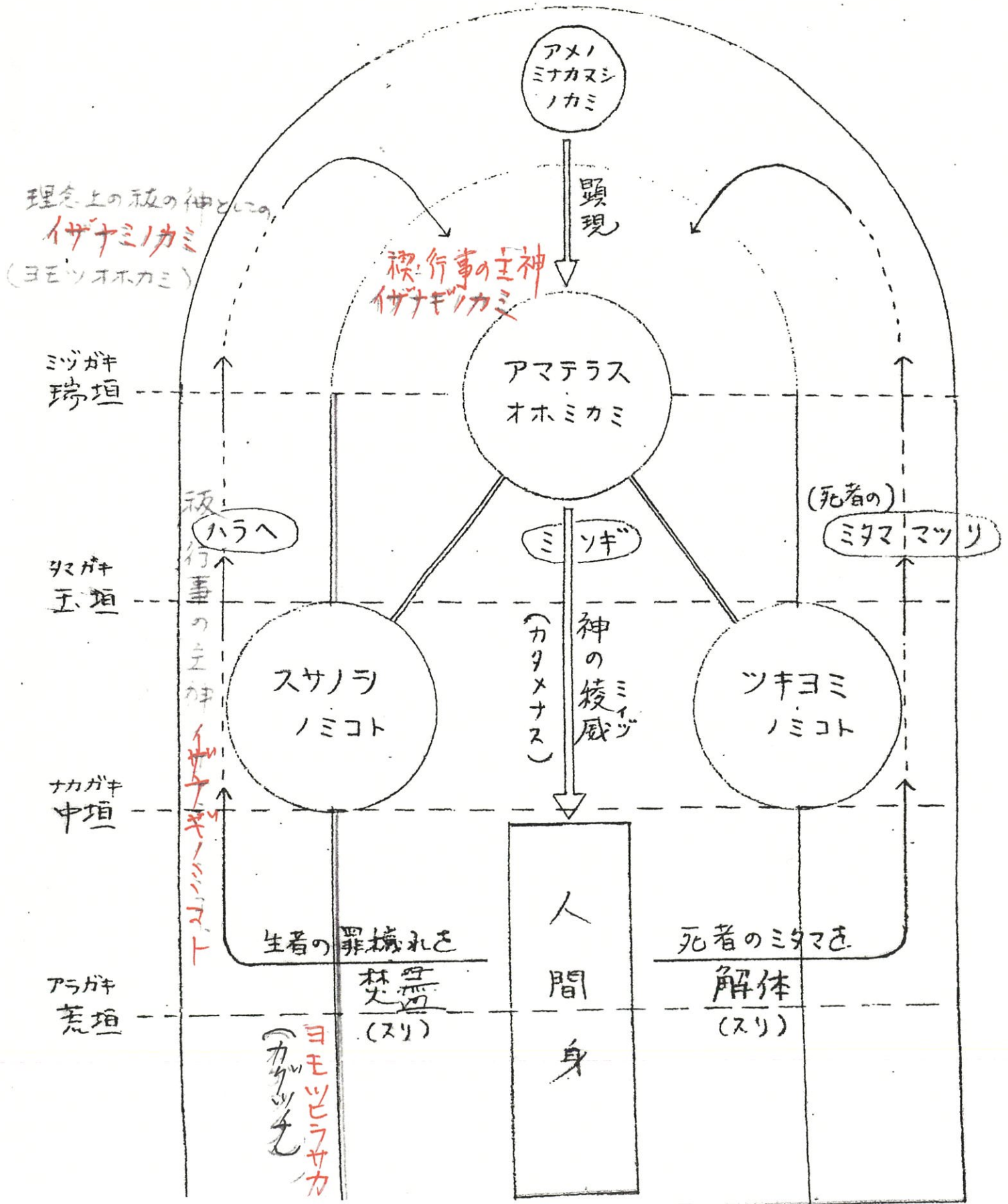
阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御覧はしますことと拝承します。

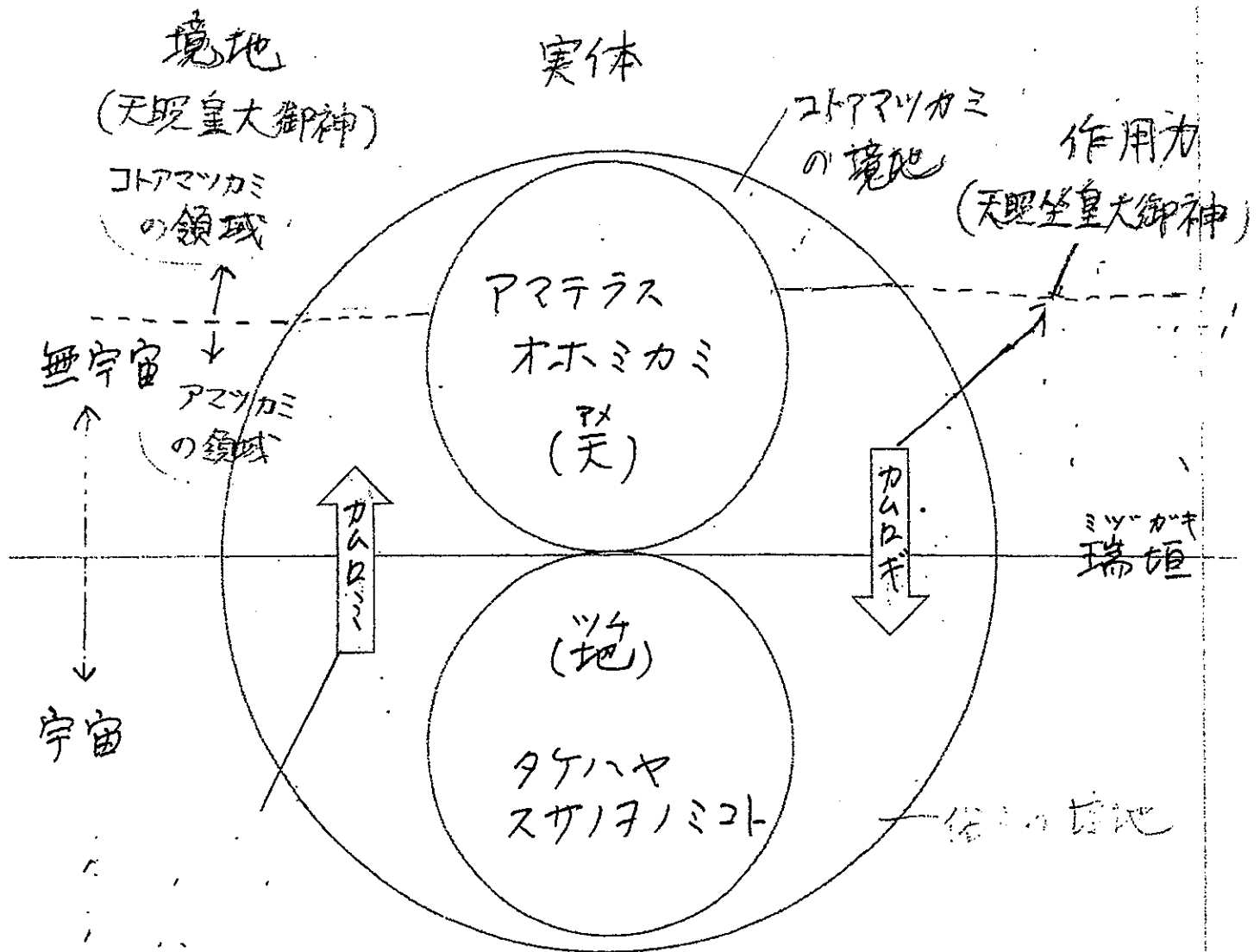
人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ



ミコトとしての基本形 (加筆版) この1.



祓いの神名の概念図



全部アマツカミ (ウツシオミ) のヒノカミ

祓いの段階では、視点が宇宙の側にあるため、

意識としても、^{アメ}天と^{ツチ}地の二項対立が成立する。

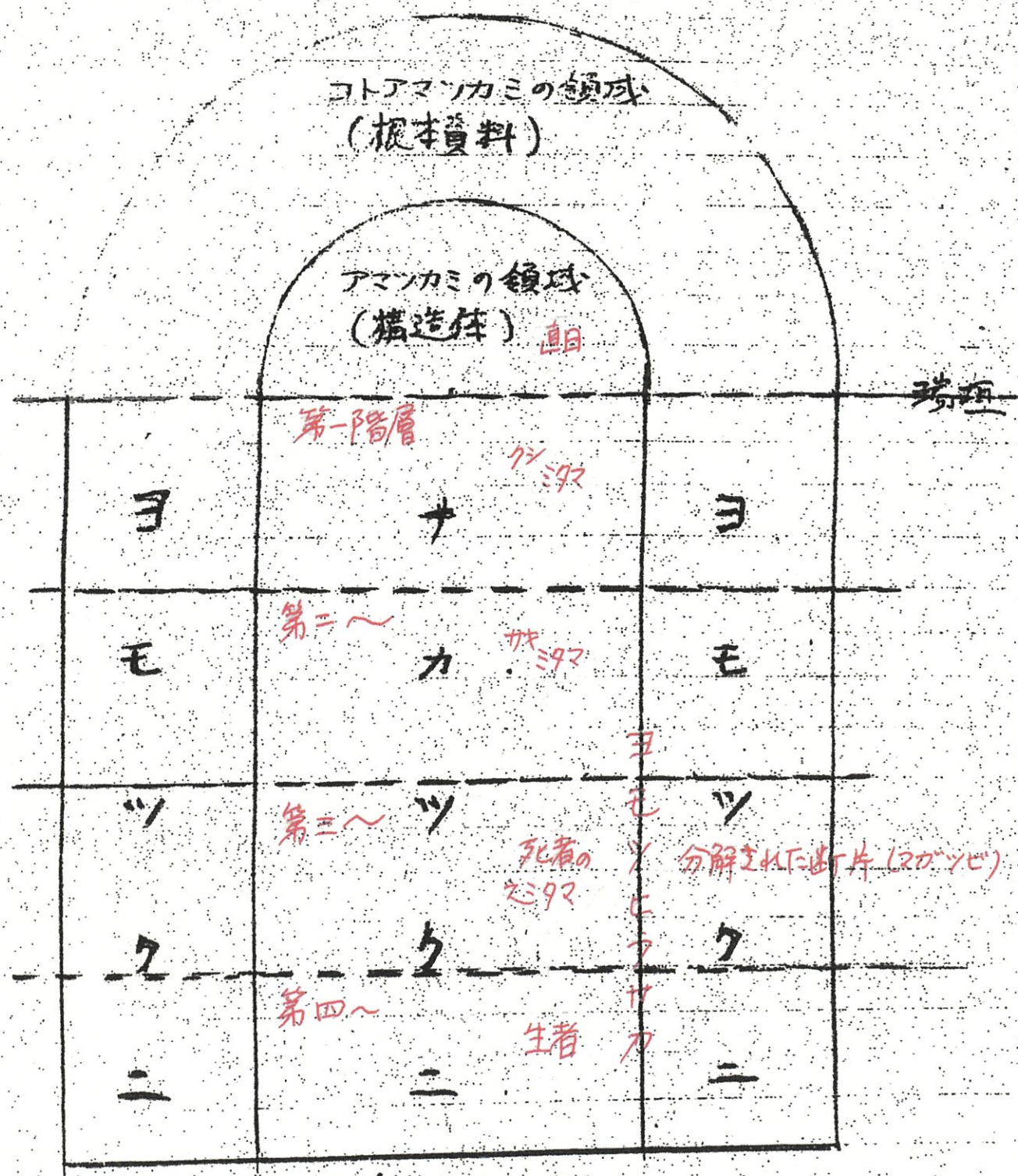
(無宇宙の側から見れば、^{ツチ}地もまた^{アメ}天の一部でしかなく、そもそも

二項対立の図式は成立しない。)

「無宇宙」と「ナカツウニ / ヨモツウニ」との関連

無宇宙

↓
宇宙



天祖の作用力を天照坐皇大御神と云う。

その作用力を二つに分ける場合

大宇宙を領域として分ける方法が二通りあるので、

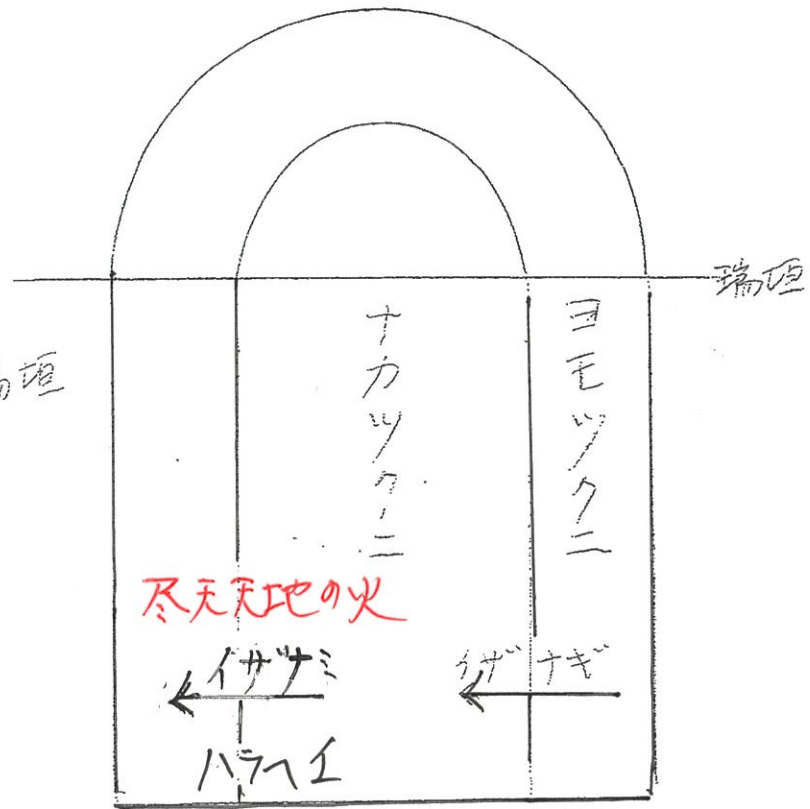
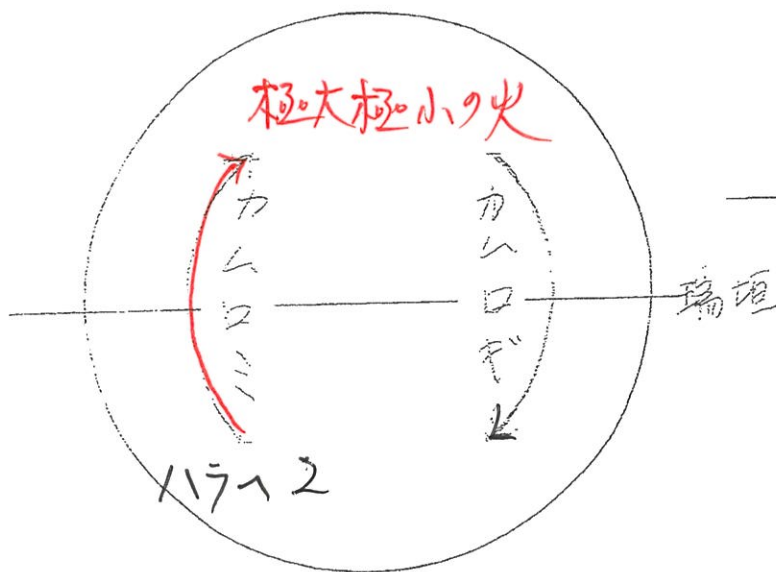
それに応じて、作用力の分け方も二通りあり、

それぞれに別個の神名が当てられている。

ミタマツリ

1. 上下にわけると。

2. 内外に分ける。

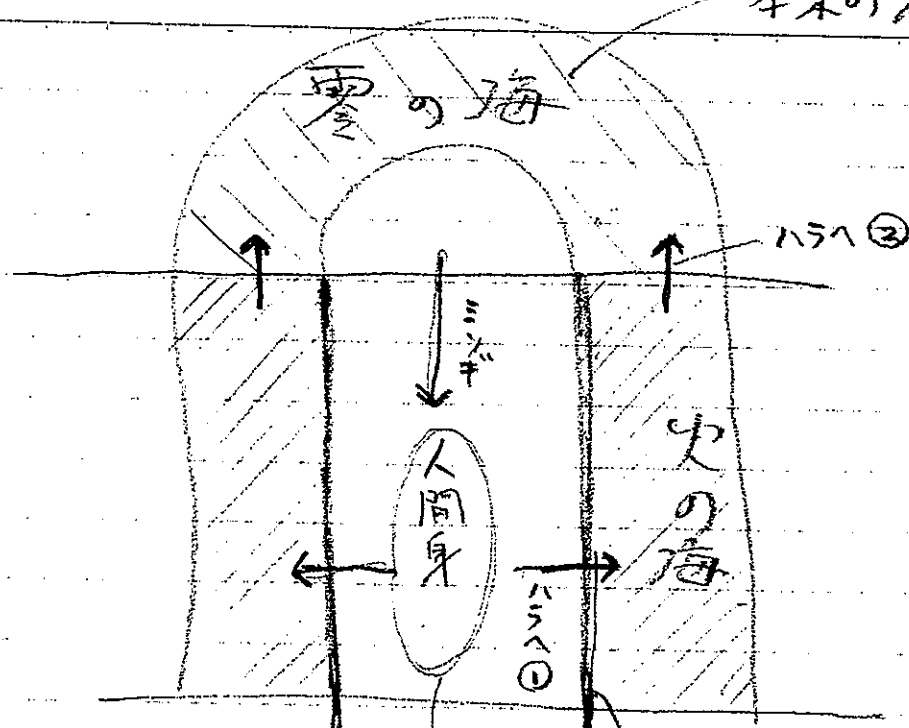


上から下へ カムロギ
下から上へ カムロミ (スリ)

カタメナス
外から内へ イザナギ
内から外へ スリイザナミ

2017.12.12.

本来の意味での神界



ヒラサカ
人の身にて築く神界楽土

大宇大宙の作用力全般を総して、天照皇太御神

広義では、イザナギ・イザナミも最初からその一部

イザナギ・イザナミの作用力を合わせた結果

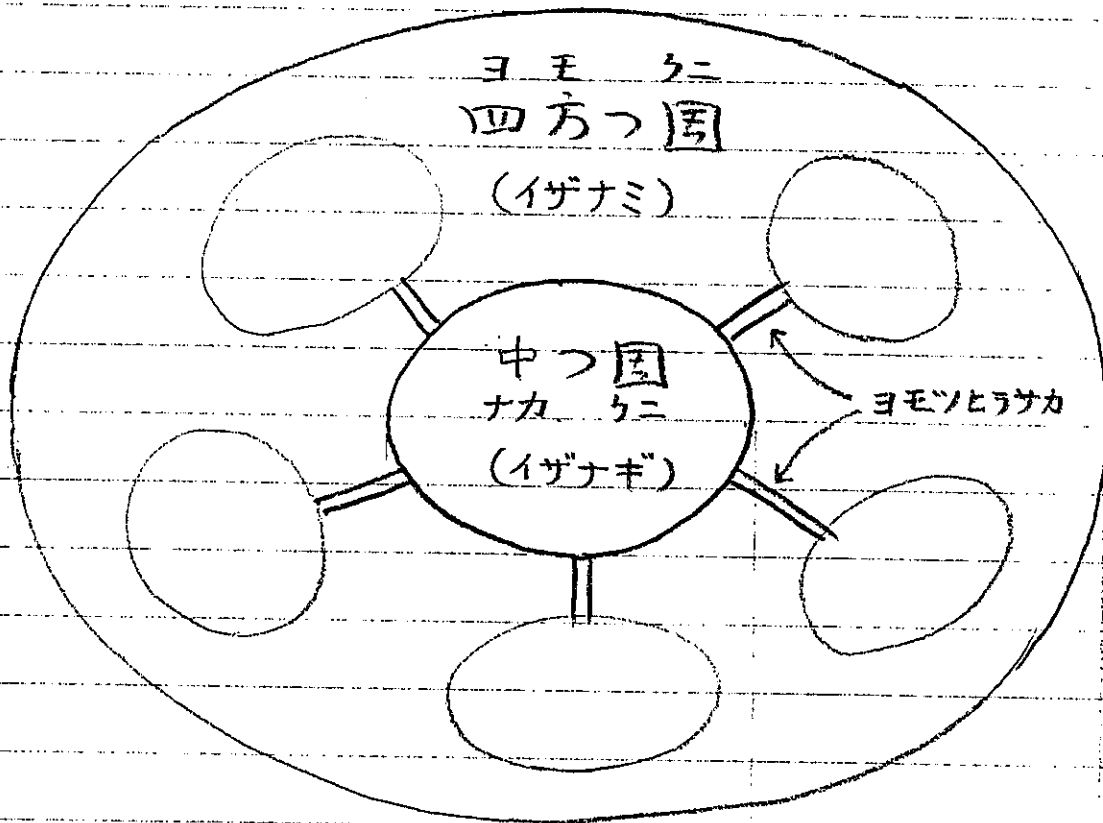
としての作用力がガッツキ

斬った、は「中心」の一点を入れた、の意味

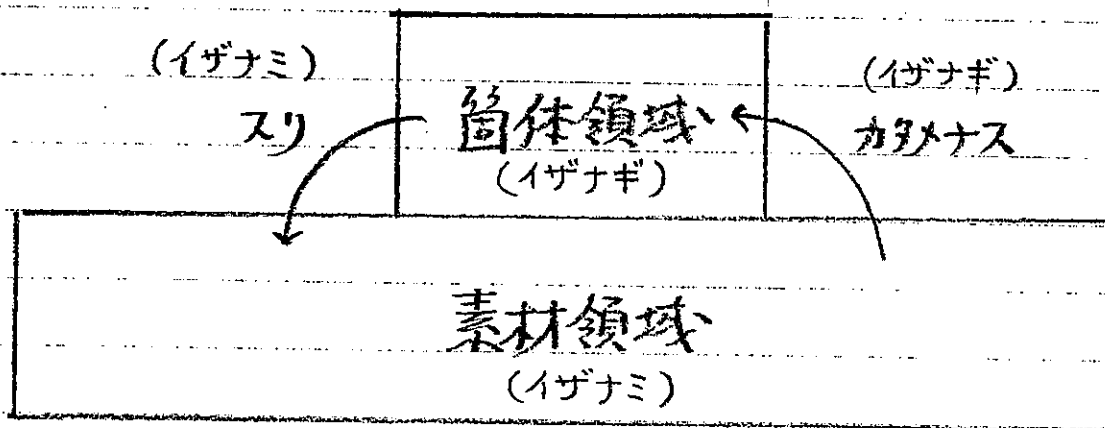
これによって、八種雷は八種雷神、もしくは
八柱の山澤見神となる。

ナカツウニとヨモツウニの関係

むしろ、中心と外部の関係と考えた方がよい。



あるいは、上部構造・下部構造として。



図表2. イザナギ・イザナミの内部構造

(イザナギ)

(イザナミ)

No 8. ウヒタニ		No 9. スヒタニ	
No 10. ツノグヒ		No 11. イウグヒ	
No 12. オホトノダ		No 13. オホトノベ	
No 14. オモタル		No 15. アヤカシコネ	
No 16. イザナギ		No 17. イザナミ	

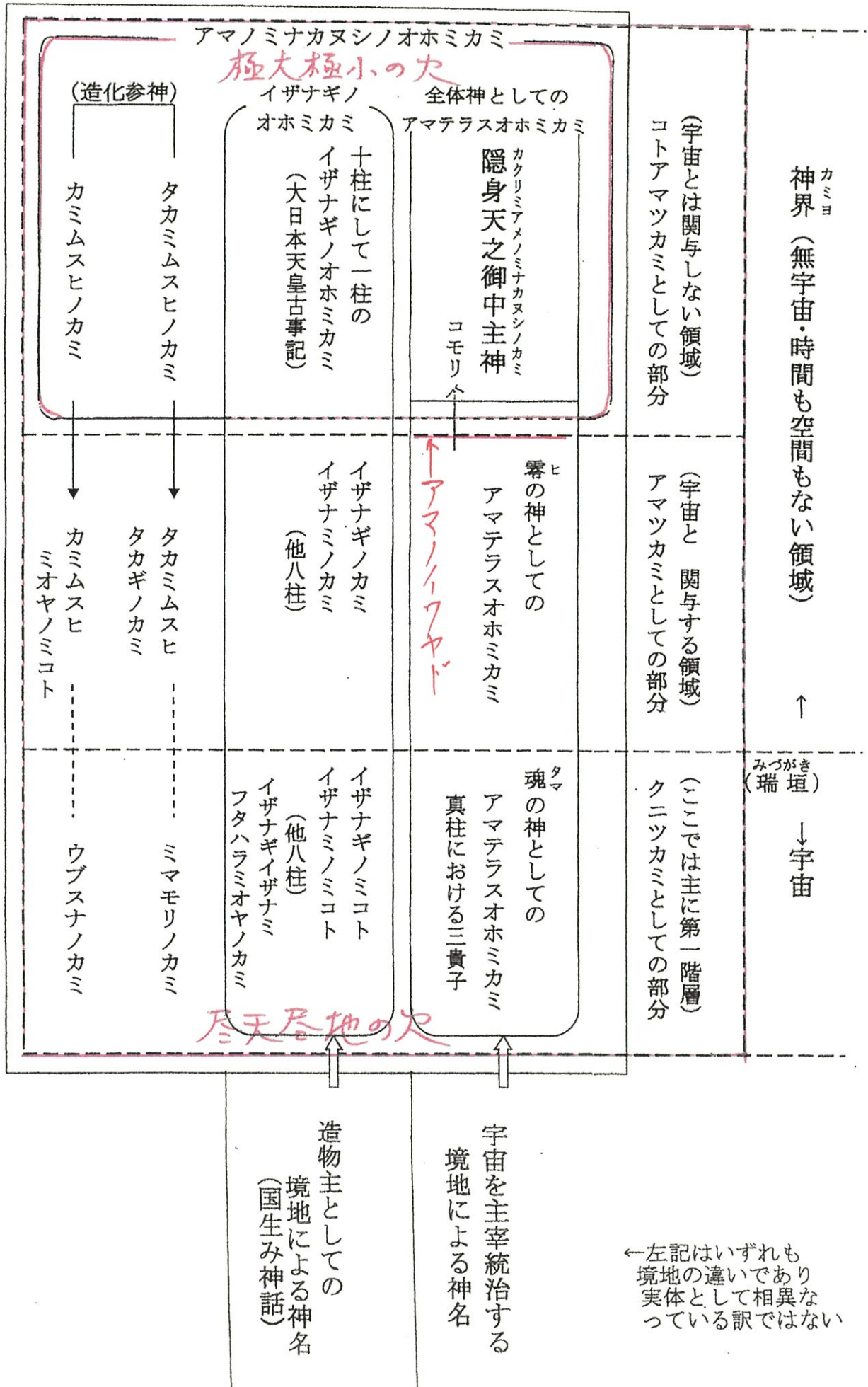
全体として、イザナギノオホミカミ、

もしくは、イザナギイザナミ フタハシラミオヤノカミ、

No. 8~15の八神は「内容」なので、
以下、独立の神格としては扱われない。

オホミカミ (全体神) の一覧
(タカマノハラ の 構造)

多田流 オホミカミ (一) (二)



九 文字通りに解すれば、伊勢から笠沙の岬に還りついで意であるが、それではおかしい。記伝には還は罷の誤りとしているが、それも独断である。

一〇 海の大小の魚。

二 お前たちは皇孫命(すめみまのみこと)に仕えまつるかどうか。即ち御饌の魚となるかどうかの意。

三 記伝に、紐というのは、懷中におびて下帯に挿す故の名であるとしているが、紐のついた小刀の意ではあるまいか。

三 動物形態説明説話である。

四 志摩の国。

五 贊は諸国から朝廷に貢進するその土地の産物、特に食料品。速贊は初物の二への意であろう。志摩の国から御贊を貢することは、内膳式に

「諸国貢進御贊、…志摩国御厨、鮮鰯、…月別惣五担、雑魚十三担。」とあり、主税式に「凡志摩国供御贊、潜女卅人。」などと見えている。

六 この事は他書に見えていない。

七 神は美称、阿多は薩摩国阿多郡阿多の地に因んだ名。従って阿多の姫の意。書紀には美人の名を鹿葦津姫とし、その別名を神吾田津姫と注している。

八 神(かみ)という訓字があるのに、この神名は音を以てよめというのはおかしい。

九 書紀には「木花之開耶姫」とある。サクヤは

5 木花之佐久夜

昆売

記伝に咲光映(はつき)の意としているが、ヤは感動の助詞であろう。美人を木の花の咲く美しさに譬えた名。

三〇 磐石が長く変らずにあるに譬えた名。

れ。」とのりたまひき。是を以ちて媛女君等、其の媛田毘古の男神の名を負ひて、女を媛女君と呼ぶ事はれなり。

故、其の媛田毘古神、阿邪訶あざか、此の三字は音を以て。地に名。に坐す時、漁爲て、比良夫貝ひらぶがひ、比より夫まで

に其の手を咋くひ合あさえて、海鹽うしほに沈み溺れたまひき。故、其の底に沈み居たま

ひし時の名を、底度久御魂そこどくみたま、度久の二字は音を以て。と謂ひ、其の海水の都夫多都時の名を、

都夫多都御魂つぶたつみたま、都より下の四字は音を以て。と謂ひ、其の阿和佐久時の名を、阿和佐久御魂あわさくみたま、阿より久

を以て。と謂ふ。

是に媛田毘古神を送りて、還り到りて、乃ち悉に鰭の廣物、鰭の狭物を追ひ聚

めて、「汝は天つ神の御子に仕へ奉らむや。」と問言ひし時に、諸の魚皆「仕

へ奉らむ。」と白す中に、海鼠白さざりき。爾に天宇受賣命、海鼠に云ひしく、

「此の口や答へぬ口。」といひて、紐小刀ひもかたな以ちて其の口を拆きき。故、今に海鼠

の口拆くるなり。是を以ちて御世、島の速贊獻る時に、媛女君等に給ふなり。

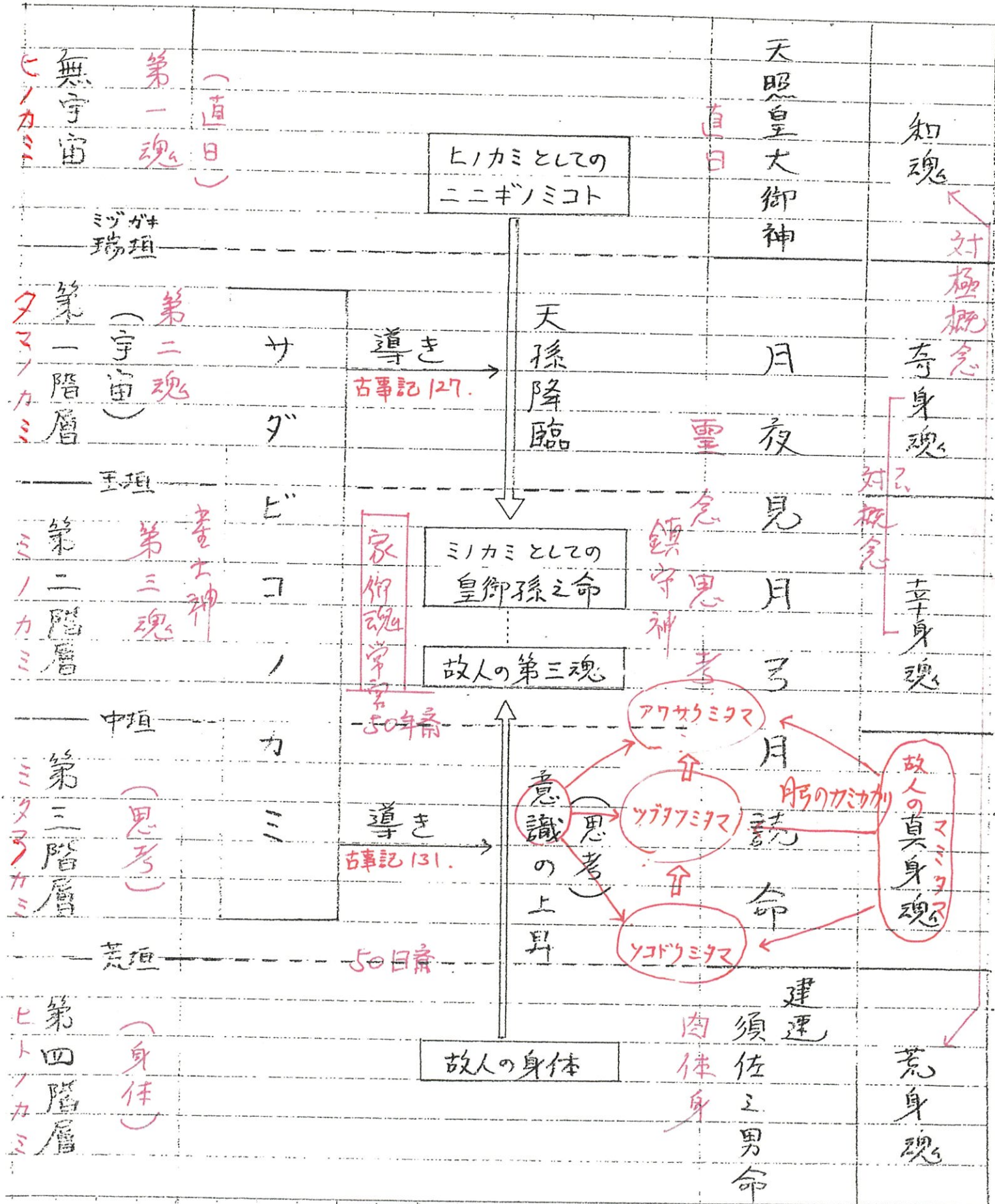
是に天津日高日子番能邇邇藝能命、笠沙の御前に、麗しき美人に遇ひたまひき。

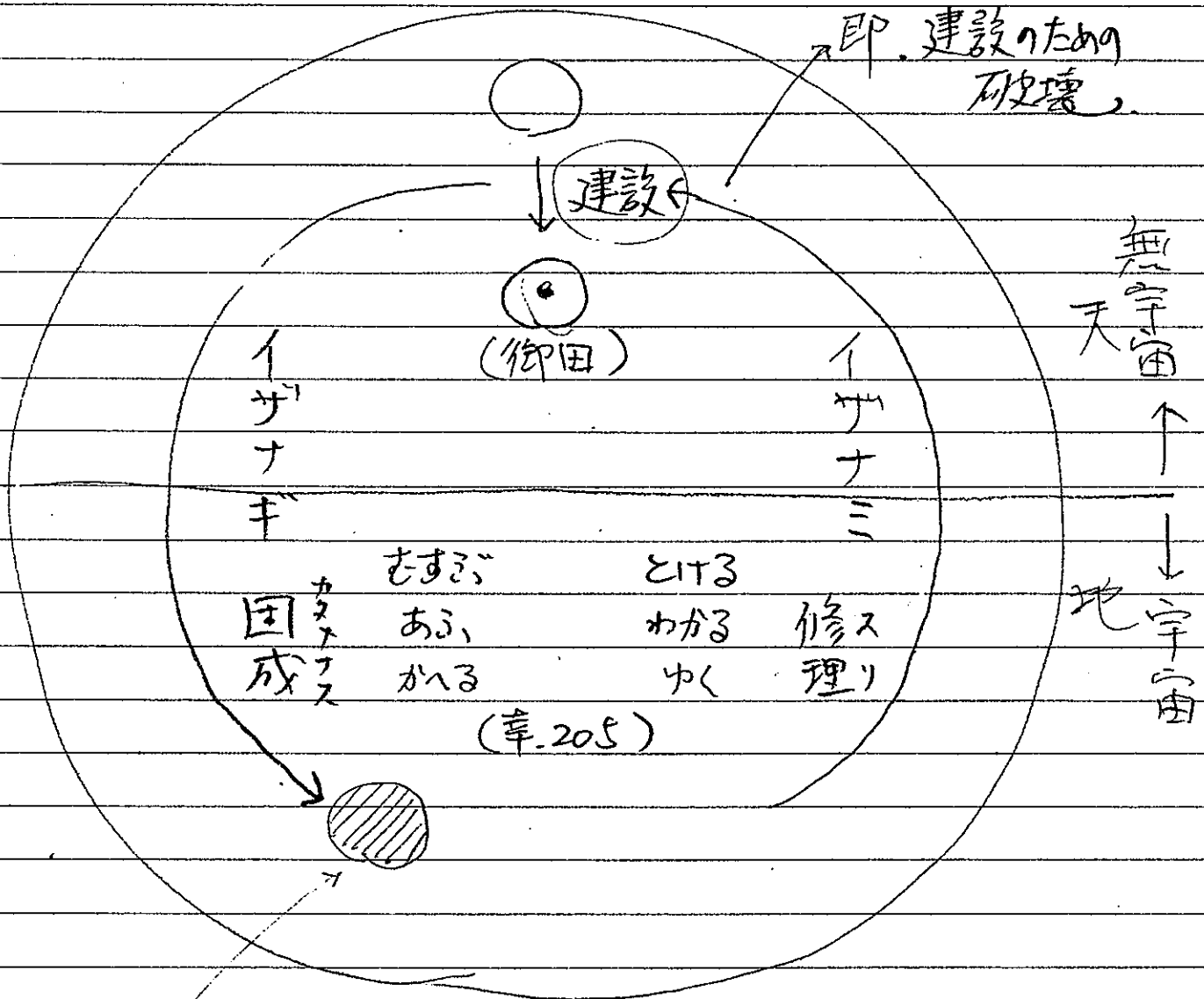
爾に「誰が女ぞ。」と問ひたまへば、答へ白ししく、「大山津見神の女、名は神

阿多都比賣、此の神の名は、亦の名は木花之佐久夜毘賣あたまひめ、此の五字は音を以て。と謂ふ。」とまをし

き。又「汝の兄弟有りや。」と問ひたまへば、「我が姉、石長比賣在り。」と答

付図、サグビコノカミの働き





「イザナギノカミの神業の成り成りたる時」

「天地は存在の尽る統一にたふ」といふ状況

アヤツク アリ エトゴト ミエタ

リ」であり、子としては芽で凸で、右目で、「シギリ」である。

古典に、八雷神と傳へたのは、子としての「メ」で、豫母都志許賣と呼ぶ。黄泉津大神と傳へたのは、母としての「メ」で、亦等しく豫母都志許賣にいたします。別れては、母と子であるが、共に「メ」である。

此の「メ」と、彼の「メ」との偶ひでは別れ、別れてはまた偶ふ。過去の過去際より、未來の未來際に彌りて、止む時無く、息む時無く、運り行くのである。

古老教へて云はく、

くすしかも、あやしきかもな。あめつちの、ありのことごと。ものみなは、ここにむすびて、そこにとけ、そこにとけては、またむすぶ。そこにわかれて、ここにあひ。ここにあひては、またわかる。わかれつ、あひつ。とけつ、むすびつ。ゆきつ、かへりつ。まがたまの、いほつみすまる。くしみたま、くすしかしこし。さきみたま、さきくまさきく。やさかにの、ふゆをこそませ。かくりよの、さちをこそませ。なきひとの、みたまみし。いまみしかみ。たまほこもちて、いまぞきませる。たましひもちて、いにますみたま。いうをえあ。

と。

その「ミタマ」は、「都夫多都御魂」であり、「阿和佐久御魂」であり、「底度久御魂」であり、猿田毘古神の御魂である。

「猿田毘古神の御魂」の神傳が存るので、私どもは、死者を齋るに、「水」を以つてすることを知り得たのである。天の「ミヅ」と地の「ミヅ」とを合せて、「麗はしき壯夫」を造り成す道を悟り得たのである。「大穴牟遲神

ミツマ

⑤

ミツマ
御霊

⑥

ミツマ
御魂

⑦

(直日)

ミツマ
身魂

コトアマツカミ

アマツカミ

クニツカミ

マ カミ
「魂の神」
5音1語

ミ カミ
「身の神」
4音1語

ミツ カミ
「身魂の神」
3音1語

ヒ
ノ
カ
ミ

ヒ
零の作用

ミヅ

別
れ
フ

解
け
フ

往
き
フ

合
ひ
フ

結
び
フ

派
り
フ

ミツカキ

ミヅとして
循環

(幸. 205)

アメノミナカヌシノカミの「
ア」は八平手の義にて開闢、「
メ」は女・陰・凹・坤・卑・
・二・平野沃土、「ノ」とは野
で産出の胎、「ミ」は身・實・
稔・充塞、「ナ」は菜・魚・肴
で資料、「カ」は晃耀赫灼、「
ヌ」は温・盜の「ヌ」と同義、
「シ」とは否で否定で、他の存
在を認めざるもので、「ノ」は
沃地淨土・火國・皇土・四十日
・曠野、「カ」は正誠正義、「
ミ」は邪惡醜陋なるものにて泥
土の義にして、十一全音の義は
生死遷流にして「人身の来ると
ころと、往くところと、来往し
つつ、来往無きところとを教へ
られたるなり。

無字前境地

表現されてゐる内容の意味

あきさめはけふはなふりそわ
がせこがみのりだからんつかの
はれまぞ。

とは、種子を完全に養ひ育つ
るに神徳を仰がざるべからずと
の神言靈なり。

アメノミナカヌシノカミの神
言靈にして、其の神徳なれば、
神事にして、高皇産靈神の別
名にして高木神の神挂なり。

あちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ
う。

以上

昭和十一年十月二十日

前頁下段の解説

「種子」は、人間で言えば根本魂^{ナホヒ}直^{ナホヒ}日^{ナホヒ}のこと。

これを完全に養ひ育てるには、アメノミナカヌシノカミの神徳を仰ぐことが必要不可欠である。

その事実を表現したのが、「あきさめは〜」の神言霊である。

また「アメノミナカヌシノカミの神徳」とは、ここでは具体的に「高木神」と表現される諸力のことである。

この「境地」を全体として
「アマノミナカヌシオホミカミ」

零の神の系譜 (一部)

天照...自王太御神

月夜見・月弓・月詠命
母う祖父

と云う。

造化參神の
カウリミ同土

タカミムスヒ
ノカミ

アメノミナカヌシ
ノカミ

カミムスヒ
ノカミ

カウリミ↑
↓ウツシオミ

祖父

祖母

零の神としての

同じ造化參神の
ウツシオミ同土

ウケヒ

タマハヤスサノラノミコト

アマテラスオホミカミ

タカギノカミ

ヨロヅハタトヨ

アキヅシヒメノミコト

婚

そのまた
分霊同土

マサカアカツカサハヤヒ

アメノオシホミミノミコト

天孫

ホノニギノミコト

アメノホアカリノミコト

御統珠

サギリ ↓ 五男神

(物実)

(零)

十拳劍

サギリ ↓ 三女神

(新たな日神)

宗像大社

五男神のうぶうら一柱

ミツカギ

この「境地」を全体として
「アマノミナカヌシノオホミカミ」

零の神の系譜

と云う。

造化參神の
カウリミ同士

タカミムスヒ
ノカミ

アメノミナカヌシ
ノカミ

カミムスヒ
ノカミ

カウリミ
↑
↓
ウツシオミ

三貴子の相対形

流出形

男神

女神

男神

(零の神としての)

同じ造化參神の
ウツシオミ同士

タワハヤスサノラノミコト

ウケヒ

アマテラスオホミカミ

タカギノカミ ↓ ヨロヅハタトヨ

十拳剣
トツカノツルギ

(物実)
モノサネ

御統珠
ミスマルノタマ

サギリ ↓ 三女神

(零)

(新たな日神)
ヒノカミ

サギリ ↓ 五男神

五男神のうしろ一柱

婚

分霊

そのまた
分霊同士

マサカアカツカチハヤヒ
アメソオシホニミニノミコト

アキヅシヒメノミコト

ホノニギノミコト

アメノホアカリノミコト

孫

宗像大社

天照大神
月夜見月三
月讀命

この「境地」を全体として
「アマノミナカヌシオホミカミ」

零の神の系譜 (一部)

天照皇大御神

月夜見・月弓・月読命

と云う。

カウリミ ↑
↓ ウツシオミ

カミムスヒ
ノカミ

アメノミナカヌシ
ノカミ

造化參神の
カウリミ同士

タカミムスヒ
ノカミ

こ55代だと
7代30神界

祖 (三皇子の相対形で捉え
る) ↑
ウケヒ

祖 (流出形における表現)
同じ造化參神の
ウツシオミ同士

タワハヤスサノヲノミコト

トツカノツルギ
十拳劍

サギリ ↓
三女神

(物実)
モノザネ

(零)
ヒ

御統珠
ミスマルノタマ

サギリ ↓
五男神

アマテラスオホミカミ

祖 (零の神としての)

こ55代含めて
36神界
というイキジ

タカギノカミ ↓
ヨロヅハタトヨ
アキヅシヒメノミコト

そのまた
分霊同士

ホノニギノミコト

アメノホアカリノミコト

マサカアカツカサハヤヒ
アメノオシホミミノミコト

五男神のうちの二柱

父

宗像大社

無事

ミツカサ

天孫

一、八尺勾魂・鏡・還雲劍・「常世思
金神」・「佐久久斯伊須受能宮」と伝
承したるは火神の神宮を知らしめんと
の神慮長きことなるべしと拜しまつる
なり。

一、速日・建御雷・建布都・豊布都
暗添加美・闇御津羽・正座山津見・淤
藤山津見・奥山津見・闇山津見・志婆
山津見・羽山津見・原山津見・戸山津
見・大雷・火雷・黒雷・折雷・若雷・

土雷・鳴雷・伏雷・豫母都志許資・

意富加牟豆美・伊邪那美・伊邪那美神

黄泉津神・道敷神・道反神・塞坐黄泉

神・衝立船戸・道長乳齒・時置師・

和豆良比能宇斯・道保・飽昨宇斯・奥

疎・奥津那藝佐昆古・奥津甲斐辨羅・

邊疎・邊津那藝佐昆古・邊津甲斐辨羅

八十禍津日・大禍津日・之れを火神の

神徳となすなれば其の神宮の大要もま

た之れに依りて窺ひまつることを得べ

きなり。

而して火神の神徳とは天照坐皇大御
神にして、火神宮とは天照皇大御神に
して、火神宮を修理固成なすなるは伊

邪那岐命伊邪那美命二柱神にして、其
の火神宮より産出し給へるは天照大御
神にてましますなり。

高皇產靈尊とは天照皇大御神の產靈
の神にてまします高木神の別名にてま
しませども、古典には明瞭なる記載な
く唯、神言靈の然ることを教ふるある
のみなり。

2019.11.26.

幸164頁 末2行.

人々は人間身の生滅起伏について、よく理解はしていない。

生まれる前にどこから来たのか？ 死んだ後にどこへ往くのか？

自分自身のことなのに何も判っていない。

だが、知らぬままで済まされるはずはないので、誰かから
教えてもらわなければならない。（以下、秘稿の内容）

これを人間に教えるのが「生死遷流」の事理であり、それが
即ち、アメノミナカヌシノカミの音義である。

アメノミナカヌシノカミとは大宇宙の大中心であり、即ち、

直日のような中心たちにとっての中心である。それ故、

直日がさまざまな種子たちを正しく養い育てるためには、

大中心の神徳を仰がざるを得ない。その事実を表現した

ミウタが「あきまめは〜」であり、より具体的に言えば、

人間身は高木神の神徳によって、大中心たるアメノミナカヌシ
ノカミの神徳を仰ぐのである。

アノミナカヌシカミ 元来自体は「中心」を意味する。
 たが、「中心」と言うがらには、必ず「外郭」があの中心で
 あり、「中心と外郭は不一不二」との言葉どおり。
 この神名元来自体が、「外郭の存在」と「中心と外郭との
 関連性」についても教えているのである。

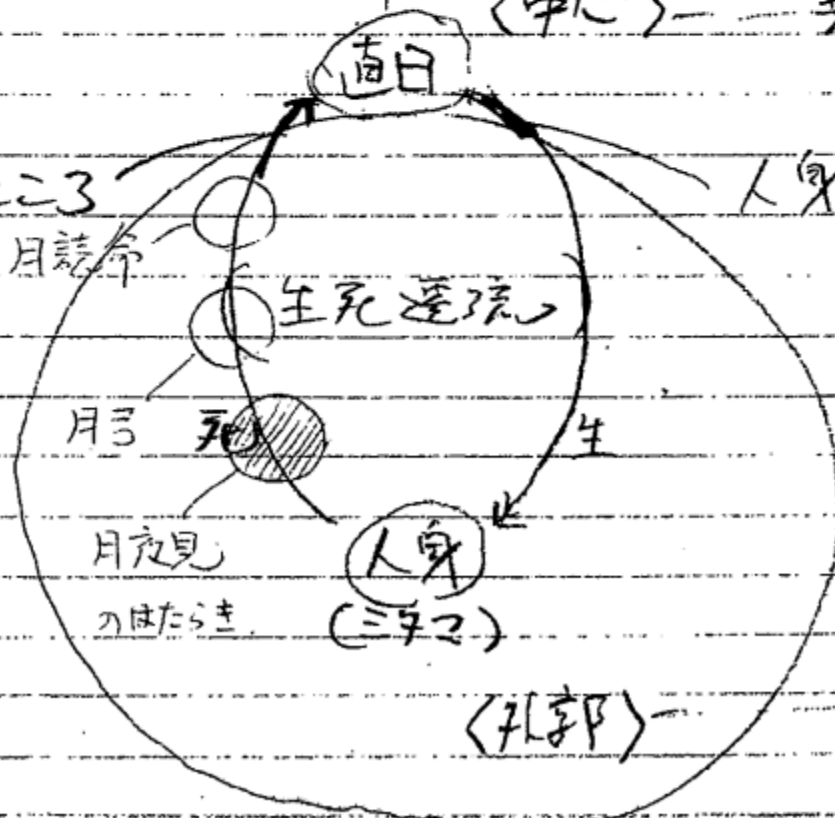
この「関連性」を一言で言うと、「生死連続」とい

う話になる。(直日はアノミナカヌシカミの分量^{ワケ})

<中心>— 無宇宙の存在

人身の
往くところ

人身の来るところ。



<外郭>— 宇宙の存在。